
俺と彼女の現代録～あのキャラがある日、俺のベッドに！？～

カガヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女の現代録〜あのキャラがある日、俺のベッドに！？〜

【Nコード】

N1751V

【作者名】

カガヤ

【あらすじ】

神様のミスでどっかの世界に転生したりする事はよくあるけどさ…

まさか俺のよく知ってるあのキャラが、朝起きたら俺のベッドで寝ているなんて…

これ、なんてギャルゲ？

【お知らせ】 7/26 プロローグ・キャラ設定加筆・修正

プロローグ（前書き）

突然やってきたアニメ・ゲームキャラとの1カ月とのドタバタ同棲を描いたラブコメ小説！

ブローグ

それはなんでもない1日になるはずだった…

朝起きて、朝食食べて、宿題終わらして、ゲームして、いつも通りの1日が始まるはずだった。

だけど…その日が、俺の運命の分岐点になるなんて思いもよらなかった。

「ふわぁ…よく寝た。と言っても朝の6時、休みなのに早起きた俺…」

今日は土曜、学校も休みで昼過ぎまで寝ようと思っていたのに…なんだか損した気分だ。

「ま、仕方ないか…眠気もないし起きます…（ムニツ）…か？ 何、今の感触？？」

起き上がろうとした俺の左手が何か、柔らかい物を掴んだ。人間の体のどこかを触ったような感触で…

「って、俺のベッドに誰がいるう！？」

あまりの出来事に飛び跳ねて、ベッドから転げ落ちた。

「あれえ？ 昨日寝た時は確かに俺だけだったよな？…まさか、夜這い！？（・・・）ノキター」

んなわけないですよ、はい（・ω・）
数十回深呼吸をして、冷凍庫からアイスノンを持ってきて頭を冷やし冷静になる。

そして、恐る恐るベッドに寝ている人物の観察を始めた。
壁側に寝ているので顔は良く見えないが…多分女の子か、女の人だ。
だって…さっき

「うつ、うつ〜ん…」

なんて色っぽい声を出してたから、うつ、免疫のない俺には猛毒だぜ…

「おはようございます…」

妹の弥生もよく俺のベッドに突撃してくるが、外泊中なので今回はありえない…

「もしもし、聞こえていますか？」

さて、どうしたものか…変に起こして誤解受けても嫌だしな…
それにしてもさっきから誰か知らないけど耳元でうるさいなあ。

「すみませ〜ん!？」

「ああもう、うるさいな。大きい声出して彼女が起きたらどうするん……だ？」

耳元で大声を出されうっとうしげに振り返った俺の目の前には…

「ようやく気付いてくれましたね。これで話が進みます」

水色の変な球体が浮かんでいて、そこから声が聞こえてきた。
ただその声は、男とも女とも子供とも老人にも聞こえる不思議な声だ。

「……………ツンツン（。ー。）σ」

「あの、突っつかないでもらえますか？」

「あ、悪い…んで、貴方は何？」

「随分と冷静なんですね…」

「いやあゝ見知らぬ人がベッドに潜り込んでた…以上のインパクトはないから」

変な球体よりも、女性運のない俺が朝起きたら第一種接近遭遇した方が驚きだ。

女友達とかはいるけど…みんな彼氏持ちだし、うちに招いた事もない。

逆に家に行った事もない、妹の友達の家になら迎えに行った事は数回あるけど。

うゝん…我ながら青春を全くしてないな。

「そうですか…同情します」

「うるさいよ！！ んで、あんたは何？」

「あ、申しおくれました。私は神様です」

「……………神様？」

「はい、神様なのです」…まあ、便宜上そう名乗ってるだけなのですけど」

何だろう、顔はないのに物凄くドヤ顔で言われてる気がする。
なんかむかつくから突っついておこつ。

（。。。）。ツンツン

「だ、だから突っつかないください！ 本当です。本当に私は神様なんです！

まあ、ちよつと他の神様とは色々違いますけど…」

「ってどういう事だよ。神様ってのは自称か？ そうだよな、こんなスーパーボールみたいなのが

神様なわけないよなあ」

「ス、スーパーボールって…私は他の神と違って姿かたちは一定じゃないんです」

スーパーボール神（仮）が言うには、この神は元々人前が出るタイプではないので

姿も形も大きさも、人と接触するのに必要な全ての概念が存在しないとの事。

「ってかお前は一体何の神様なんだ？」

「えつと、ですね…分かりやすく言うと私は、『世界の壁』を護る神様…とてもいいまじょうか？」

「世界の壁？ なんだそれは？」

「それはですね…そこに居る人に関係してるのですが…」

そう言つて視線？が、自然と俺のベッドの方へ向く。

「まさか、アレはあんたのせい…とか？」

「はい…私がミスしたせいで、アニメやゲームと言つた世界の住民を間違えて…この世界に…」

「つまり、小説とかでよくある…転生や幻想入りとかそういう類の逆バージョンって事？」

「……アレとは少し違いますが、大体その通りです…」

このスーパーボールの話をもとめるところだ。

『世界』とは無数に存在し、その中には漫画やゲームの題材にもなった『世界』があった。

本来なら『世界』同士は行き来するどころか、互いの存在すら認知出来ないとの事。

もし、たまたま違う『世界』に迷い込んだりした者を、記憶を消して元の世界に戻すなどをするのが

このスーパーボールの役目で、人前に出る事も認知される事も今までになく

他の神様のように信仰対象になる事もない。全く知られない神様…
と言う事らしい。

「…というわけで、あなたは私と初めてまともに出会った人間と言う事になります」

「まともに、ねえ…」

「?? 名誉だとか思わないんですか？ 今まで私は存在自体知られていなかったんですよ？」

「今までも『世界』を超えようとしたものは人や魔物やら少なからずいましたけど。」

「全て私や他の神様によって消されているのに」

「さらにすぐく物騒な事を言った気が…でもともかく…」

「いまいちぴんとこない。まあ要するに…やっちゃいけない事を監視するはずの神様が」

「…つまり、自分自身で一番やっちゃいけない事をやっちゃった…というわけだな？」

「…うぐっ…そ、その通りです」

なるほど、よく俺が二。二。動画とか二次小説で見る、転生乙とかと逆に

このベッドで寝る人はどつかのアニメやゲームの住民で…

本当ならあり得ない事だけど、この丸い神様のせいで、俺の部屋のベッドに移された…と。

「なんで俺のベッドなの？」

「えつとですね、たまたま…たまたまですよ？ 『壁』の点検をしている時にですね…

クシャミをしまいまして…そのはずみで穴が開いちゃったんですよ

そして、その穴があなたのベッドと、その人の寝室に繋がっていで、ポチャンと♪」

「…ちよつとまで、世界の壁つてのはクシャミ一つで穴が開くほど脆いんかい！」

「絶対あり得ないんですけど、そこは私、流星は神様、クシャミ一つで偉い威力 ですよね♪」

……目の前のスーパーボールを両手で握りしめて…思いつきり力を籠めて♪

秘技・人間万力♪

「イ、イタイ、痛いです！ ごめんなさい、謝りますから私を押しつぶそうとしないでください！」

「まさか、と思うが…俺にこの人の面倒を見ると言うんじゃないだろうな？」

「あ、よくわかりましたね。あなた物分かりもよさそうなのでピツタリと思ったんですよ！

大丈夫です、ほんの一カ月でいいんですから。本当ならすぐにも戻してあげたいのですが

先に穴を修復しないとダメなんで…お願いできませんか？ 生活費も多めに渡しますよ？」

と言いつつ、いつの間にかジュラルミンケースが俺の脇に置かれていて

中を開けると諭吉さんが大量に（＊＾・エ・）ノ コンチャ♪と詰め込まれていた。

「……（パタン）」

「おや、無言で閉めるなんて、普通ならイヤッホウ！ とハイテンションになるのでは？」

「この状況が既に普通じゃないだろ！ それに俺は別に金欲しいわけじゃないし」

「とか言いながらさり気なく自分の後ろにケースを置いて、もらう気満々ですね…」

ちっ、バレたか。

このスーパースポール、なかなかやるな。

「いえ、バレバレですから…」

「………ってか、その姿どうにかならないか？」

「そうですね、私としては不便を感じませんが、あなたがそう言うなら…」

では私の姿をあなたがイメージして下さい」

「はい？」

「あなたの頭に思い描いた姿に変わります、その方が話しやすいでしょう？」

思い浮かぶ姿、か。俺はじつと目の前の球体を改めてみる。クシャミ一つでとんでもない事を起こすドジっぷり。

神様と言う割には威厳も何もない口調：カリスマの力の字もない。
うん、決めた。

「よしっ、思い描いたぞ。あんたに相応しい姿が！」

「わぁ、楽しみですっ では、変わりますっ」

水色のスーパーボール神は輝き始め、見る見るうちに人間の形に変わり始めた。

「あ、言い忘れてましたが、彼女は私の力で眠っててもらっていましたが…」

そろそろ目を覚ましますよ？」

「っておおい！ そういう事は早く言えよ！ こっちはまだ心の準備ってものが出来てないんだぞ！」

ってか、肝心の誰が俺のベッドに居るのか聞くの忘れてたー！！
？（「■」！）！？

「うっん……こっちは…」

ベッドを見ると、眠り込んでいた彼女がゆっくりと起き上がってきた。
た。

その姿は俺のよく知ってるあのキャラだった。

そのキャラの名前は……

続く

プロローグ（後書き）

カガヤ

「はい、始めちゃいました…新小説!」

主人公（仮）

「……なんで、俺の名前は主人公（仮）なんだ?（汗）」

カガヤ

「だって…お前の名前まだ出してないじゃん。先に妹が出ちゃったな（笑）」

主人公（仮）

「ドチクショー…早く、俺の名前だせえ!（涙）」

カガヤ

「ちなみに、この小説に登場するゲーム・アニメキャラのヒロインは基本的に1章に1人です」

主人公（仮）

「簡単に言えば、このプロローグが終わったらオートセーブされて、キャラ毎の章が終われば自動的にプロローグ後から始まるってやつ、随分と面倒だな（汗）」

カガヤ

「なので、違う作品のヒロイン同志が主人公を取り合うという三角関係とかはありませんので…とりあえず、1人目のヒロインは『幻想郷』からやってきます!」

カガヤ

「7月26日に加筆修正しました、色々描写不足があったので（汗）」

「

キャラ設定（ネタバレ注意）（前書き）

主に登場するキャラの設定です。

キャラによっては名前しか出ない章もあります…

キャラ設定（ネタバレ注意）

・主人公

萩城 瑠樹

年齢：16（高1）

容姿：少しばさばさした黒髪で、服装は気分次第で決める。身長は高めで着痩せしていて服を脱ぐと結構がっちりとした体格をしている。

イメージCV：中村悠一

性格：面倒くさがり屋、興味を持った事には命がけ、面白い事が大好き、動物好き。

好きな物：家族、カツカレー、バトル物のアニメやゲームや小説、悪友・哲（玩具的な意味で）

嫌いな物：悪友・哲（無駄な知識ばかりよこしやがって）

この小説の主人公。

オタクではないが、アニメやゲームなどの知識は割と豊富。

その知識の元は悪友の哲の影響。微妙な女運の持ち主で、彼氏持ちの女性や奥様と仲好くなる事が多いので、付きあった人はいない。表面上、彼女はもうでもいいと思っているが、内面ではすごく欲しがっている。

中学時代に3年連続『良い人で終わりそうな男子生徒No.1』と言

う不名誉な称号を持っている。

熱いのか涼しい性格なのかは分らないが、悪友の制裁に対しては通常の4倍の力が出る。

家族仲はかなり良好だが、自分の女っぽい名前に関しては若干両親を恨んでいるとか。

なかなかのドS、でも押しに弱い。

・神様

スーパーボール神（瑠樹命名）

【外見】

第1章：羽入（ひぐらしのなく頃に）

クシャミ1つで瑠樹のベッドと他の世界を繋げてしまった駄神。

世界と世界の壁を見守る役目を持っていて、名前も性別もそういう概念すらなかったらしく

最初は水色のスーパーボールのような姿で現れた。

その姿だと不便と言う事で、瑠樹のイメージした通りの姿になる事になったが

基本的に姿かたちだけイメージ通りになったが性格まではあまり変わらなかった

章毎に外見が変わるが、基本的に女の子。

役目上、人間と『まとも』に会話したのは瑠樹が初めての為、密かに喜んでいた。

イメージCVは外見通りの声優になる。

・主人公の家族

瑠樹の家族は旅行や出張に行ってる事が多い。
章毎で登場パターンが変わってくる。

【登場】

1章：全員家族旅行中

萩城 はぎしろ 弥生 やよい

年齢：13（中1）

性格：素直すぎな小悪魔。お兄ちゃんが好き（玩具的な意味で）。
料理が苦手。

容姿：年相応の少し大人っぽい雰囲気を出し始めたチビっ子、髪は
茶髪のセミロング。
身長・見た目共にまだまだなので、母のような体付きになるのが
夢。

イメージCV：野中 藍

好きな物：家族、激辛カレー、恋愛系漫画・ゲーム

嫌いな物：甘い物、コミンナ哲、バッドエンド系作品。

瑠樹の妹。

兄のベッドに押し掛けるのが朝の日課だが、別にそこまでブラコン
ではなく
友達から教えてもらった兄妹のコミュニケーションを実践しているだ
けらしい。

耳年増なので兄をよくからかうが、反撃されるとあたふたしてしまう。

ロリコンな哲にお持ち帰りされそうになり、その度に兄妹で見事なツープラトンを決めている（笑）

萩城 はぎしろ 葉瑠 はる

年齢：32

性格：大らか、万年バカップル、千尋の谷に子供共々落っこちるタイプ、一番の天然ボケ。

容姿：栗色の長い髪を束ねていて、その日の気分次第で髪型を変える。

身長も高く、プロポーションも良い。弥生と姉妹に間違われるほどに若々しいが

そのせいで夫と歳の差夫婦に見られるのが悩み。

イメージCV：皆口 裕子

好きな物：家族、カレー全般、旦那様、牛乳料理、子供、

嫌いな物：嘘、泥棒、孤児・子供虐待系のドラマ。

瑠樹と弥生の母。

16の時に幼馴染で高校の先輩であった夫・勇樹と駆け落ち未遂の末にできちゃった結婚した。

双方の両親は高校卒業後に結婚させるつもりだったので、喜んで2人の結婚を認めた。

昔から子供好きで、家なき子など子供が不幸になるドラマなどが大嫌いで

近所で子供が虐待を受けていると知った時、物凄い形相で乗りこんで一晩中説教して

見事改心させたという伝説を持っている。

ドジ属性の持ち主で瑠樹に初めてお使いさせようとしたら、肝心の買い物内容を教え忘れ

1人スーパでアタフタする瑠樹の元へ車を爆走させ、失敗させた事がある。

萩城 はぎしろ 勇樹 ゆうき

年齢：33

職業：不明（瑠樹と弥生は全世界何でも屋と認識）

容姿：身長は葉瑠より少し高い程度、スポーツ刈りをした黒髪でサングラスを好んでかけている。

サングラスをかけていると年齢以上に老けて見える。だが、外すと若く見られる事もある。

イメージCV：中田 譲治

性格：真面目：に見えるだけ、子煩悩、偽カリスマ、万年バカップル

瑠樹と弥生の父。

謎の仕事をしているらしく、世界各地へ出張を続ける。

たまに我が家に帰ってくると家族を旅行に連れ出す事が多い。

子供に父の威厳を出そうとするが、2人の顔を見ると一気に洩んで

しまう。

よく出張先から電話をかけてくるが、その時の妻・葉瑠との会話は甘い物が嫌いな弥生曰く『見るもの全てが生クリームに見える』程らしい

・その他

九柳 哲くりゅう てつ

年齢：16（高1）

性格：変態と言う名の変態、変態を極めた男、でも彼女持ち

容姿：瑠樹曰くゲームの主人公のような整った顔で美顔。
赤みのかかった茶髪で、天然パーマ、身長は学年一高い。

イメージCV：阪口 大助

好きな物：鬼畜系以外のギャルゲー、彼女（怜）、FPSゲームの
爆発系武器、友情

嫌いな物：鬼畜系アニメ・ゲーム、同性愛

瑠樹の幼馴染で悪友。

最凶の変態だが、彼女がいてその事がクラスメートの中で世界七不思議の1つと認定されている。

弥生を見ると暴走してしまい、その度に手痛い制裁を色々な人から喰らっている。

彼女である怜とは、瑠樹のおかげで付き合いだしたのでかなりの恩義を感じている。

それを理由の1つにして、瑠樹に様々な燃え萌えアニメのDVDやゲームを押しつけている。

瑠樹の部屋にあるそれ系のグッズなど9割9分は、哲が持ち込んだもの。

東光院 怜
とうこういん れい

年齢：16歳（高1）

性格：姉御肌、残念なクーデレツンデレ、哲と2人きりの時はツンツンしながらも甘えん坊。

容姿：大学生に間違われるほどにスタイルが良い。黒いショートヘア。

密かにファンクラブがあるとかないとか…

イメージCV：櫻井 浩美

好きな物：哲、小動物、占い、ツマミ（酒は嫌い）、声優

嫌いな物：辛い物、アクションゲーム（苦手だから）

哲の彼女で瑠樹の幼馴染。

瑠樹、哲、怜は小学校時代からの腐れ縁で、中学時代に瑠樹の働きで哲と恋人になった。

その事で瑠樹に恩義を感じていて、瑠樹に彼女が出来ない事を心配している。

一人っ子なので弥生を自分の妹のように思っていて、弥生も懐いている。
哲の変態っぷりには頭を痛めていて、弥生をお持ち帰りしそうになると

瑠樹、弥生の2人と『地獄のスリープラトン』で撃退する。

キャラ設定（ネタバレ注意）（後書き）

カガヤ

「と、言うわけで名前は瑠樹、になりました！」

瑠樹

「うーん、微妙に女の子っぽい名前だな…」

カガヤ

「そうでもない…と思う（汗）」

瑠樹

「まあいいや。これでヒロイン以外のキャラの設定は大体出たけど…出番は？」

カガヤ

「章毎に大分役割も変わってくるよ、とりあえず瑠樹の家族は皆海外旅行中」

瑠樹

「なっ！俺だけ留守番か（´・ω・｀）」

カガヤ

「まあまあ…おかげでヒロインと2人きりになるんだし」

瑠樹

「それも…そうだな、うん。父さん母さん弥生、しばらく旅行楽しんできてくれよ！」

カガヤ

「2章以降はまた違ってくるんだけどね…あと、追加設定などがあれば随時更新しますので…それでは！」

カガヤ

「7月26日、容姿とイメージＣＶを追加しました…完璧に忘れてました（汗）」

八雲藍の章 第1話 「藍しゃま、現代入り」

ーポンッ

「…（。　。　。）エッ!？」

突然、ベッドから何やら黄色い尻尾が数本生えてきた。
先程まで寝ていた女性は、ゆっくりと起き上がり帽子を脱ぐ…

「…は、どこだ?…私は一体…」

ーヒョコ

「…Σ（（　　、　*　）エエッ!？」

帽子の下から見えたのは…耳、それも普通の耳ではなく、よく言う
獣耳だった。

「ん、誰だ。君は？」

「Σ（（・□・）!」

そして、振り向いた女性の顔を見て俺の驚きは限界突破した。

「や、ややや…八雲藍…!!?（ノ。?。?。）ノ」

「ん、なぜ私の名を知っているんだ?…怪しいな」

あ、やばっ。素人の俺にもわかる。

『やくもらん は せんとうたいせいに はいりました』

なぜにファミコン風なのかはさておき…ヘルプミ〜神様！

と、神様の方を見ると、既に変身は完了していたようで俺の思い描いた神様になっていた。

「あうあう…これは一体どういう事なのですかあ？」

よしっ、俺の思った通り…『ひぐらしのなく頃に』の『羽入』の姿になった！

「いや、何って…神様の姿思い描いただけだよ？ ドジっ子で神の威厳まるでない神様」

「だからってなんでこの姿なんですかあ！ このキャラは割と最後では神様っぽかったじゃないですか！」

「なら、問題ないだろ？ それより藍さんに説明を…あり？」

さっきまで感じていた殺気に似た重圧がめっきり消えてしまい、恐る恐る藍さんの方を向くと…

「なっ、こ、これほどの神が…なぜこんな場所に！？」

畏れ多い、と言う感じでベッドの上にひざまずいていた。

「あれ、何も言っていないのに神様だって気付いたようだけど？」

「あゝ、幻想郷には神様たくさんいますから、ボクの事察したんだと思いますよ」

「ええ、貴方様からは幻想郷にいるどの神よりも神々しい力を感じます。それで…」

あなただのような強い神様と親しげに話す君は…何者なんだ？」

おつ、この神様…羽入と呼ぶか。羽入のおかげ（？）で少しは警戒心が和らいだみたいだ。

「初めまして、俺の名は萩城瑠樹と言います…えっと、ほら、羽入。藍さんに説明して!」

「あ、はい。藍さん、ボクの話を持ち上げて聞いて欲しいのですが…まずは…ごめんなさいなのです!」

「…い、いきなりどうしたのですか…羽入様、でよろしいでしょうか?」

いきなりの神からの全力土下座に藍さんは面をくらったようだったが、しかし、藍さん流石だね。羽入に対しても神様としてちゃんと敬った言葉づかいしてるよ。

「それが普通なのです! 瑠樹はもう少しボクを敬ってほしいのです!」

「地にツツコムな! それに、そんなドジっ子神様なんか敬う方が無理だつての!」

「じゃ、じゃあなんで藍さんには敬語なんですか! 納得行かないのです!」

「藍さんと比べる方がおかしいだろ、あんなに綺麗な人、滅多にいないんだぞ!」

「(……き、綺麗、か(ノノ・|・ノノ))」

「ぼ、ボクだつて今は美少女の姿です!」

「黙れ、駄神! お前に藍さんが救えるか!」

「(……あまり、言われた事はないな…(ノノ・|・ノノ))」

・
・
・
こうして延々と無駄な会話が30分ほど続き…

・
「「ごめんなさいでしたm（。）。」」「m ペコペコ……」
「あ、いや……そこまで謝らなくても……」

藍さんをほったらかしにしていた事に気付き、全力土下座を2人して繰り出す羽目になりました。
それにしても、なんだか藍さんほのかに顔、赤くない？

「コホン、それで羽入様。瑠樹さんの所に1カ月ほど滞在すれば幻想郷に戻る、と？」

「はい、その通りです！ 幸い藍さんは紫さんの影響で外の世界の色々な技術や常識は

ある程度身に付いていますし、耳や尻尾も自分で隠せるので何も問題はないと思います」

「問題はたくさん、あるだろうが……！」

「あ、あうあう……痛いのです、グリグリはやめてくださあい！」

無責任な事をいう駄神にみさえ直伝のゲンコツグリグリ
みさえって誰だあ……！

……哲よりヤワな頭してるなこの駄神は。

「ま、まあまあ……瑠樹さん。その辺で……」

若干引き気味に藍さんが言って来たので仕方なく、駄神から両手を離す。

ふん、藍さんに感謝するんだな！

「あうあう……た、たすかったのですう……」

「私は幻想郷に戻るのであれば、1カ月程度我慢できる。これで

も数千年生きた妖狐だからな

ただ…」

そう言つて藍さんは申し訳なさそうに見つめてきた。
居候先の俺に迷惑がかかる、と考えているのだろう。

「俺なら大丈夫ですよ、家族はみんな海外旅行に出かけたつきりですばらくは帰つて来ませんから
それに帰つて来たとしても、うちの家族ならみんな藍さんを迎えてくれますよ」

安心させるようにゆつくりと話すと、藍さんはホッと息をつき、安堵の笑みを浮かべた。

「それでは…瑠樹さん、これから一か月世話になります。あ、家事全般は私がやりますよ」

それは正直助かる。家事は嫌いじゃないが、掃除とか結構手間かかるからなあ…1人じゃきつい。

「それじゃお願いします。それと、俺の事は瑠樹でいいですよ。さん付けはなんだか照れます」

それに俺の方がかなり年下なんですから敬語もいりませんよ」

「むっ、事実だが…真正面から、かなり年下と言われると…正直凹むのだが…」

「ああゝごめんなさい！ ちょっと、ほんのちよつと俺の方が年下…ですよ」

藍さん、なんだか大人の雰囲気出てますし、家庭的で落ち着いてて綺麗な所が

大人の女性らしくって…その」

「ぷっ…あはは、もういい、もう十分だよ。これ以上は恥ずかしくて…でも、ありがとう」

私の事も藍、と呼んでくれて構わないさ、私の方がお世話になるのだからな、瑠樹」

あたふたと言いつい訳にならない言いつい訳をしていると、藍さんは急に笑い出してしまった。

そして、笑顔と共にお礼を言われ、自分の顔が熱を帯びてくるのを感じた。

こんな美人から、笑顔で言われて赤面しない男はいない！
これが哲だったら、赤面どころかルパンダイブしそうだな……

「うん、これからよろしく、藍」

「ああ」

2人で握手を交わし、それから微笑みあった。
やっぱり、美人の笑顔は凶悪兵器だと思う。

「あうあうあう、今度は私が置いてけぼりなのですよ」

「「あつ…」」

部屋の隅で駄神がいじけていた。

「ではでは、ボクはそろそろ穴の修復にとりかかるのです！」

あらかたの事情説明とこれからの話し合いを終え

駄神羽入は自分が空けた穴の修復にとりかかるとの事だ。

「おう、がんばれよ駄神…またクシャミして穴広げるなよー？」

「い、いい加減駄神言うのは辞めてほしいのです！ それにあんなドジはもう一生しないのです！」

「羽入様…どうかよろしくお願いします」

「藍さんも慣れない現代生活かと思えますけど、頑張ってください」

「はい、ありがとうございます…それと、紫様達にも私は元気ですと伝えてください」

「もちろんなのです」

穴の修復の前に、駄神は幻想郷に行き、藍の主である八雲紫に会いに行き

事情を説明するらしい。紫さんのスキマでもこの世界へは来れないらしく

今頃は大騒動になっているかもしれない、と藍が青い顔をしたからだ。

そして、駄神は鈍い光を放ったかと思えば、この部屋から消えてしまった。

あとに残ったのは俺と藍の2人きり

「……………」

「……………」

なんとなくぎこちない空気が流れ、藍の顔をなぜか見れない俺は自然と視線が下へと向き

いつの間にか藍の尻尾を凝視していた。

「ん？ 瑠樹は私の尻尾に興味があるのか？」

「いやいや、その…毛並みがよくてふわふわだろうなって思って…そこまで色が綺麗な尻尾をした人なんて

この世界にはいないから、その…珍しくって。それに俺、動物好

きなんで…」

「ふむ、まあ尻尾の生えた人間は普通はいないからな…そうだ、私の尻尾。触ってみるかい？」

なんでもないというふうに自分の尻尾を俺の方に向けてきた。

正直…すごく魅力的なお誘いではあるが、勢い余って変な所を触りそうな気がする。

出会ってまだ数時間の女性にそんな事をした日には…

『よくやった、瑠樹！ これで今日からお前と俺は真の変態ブラザーになった！』

『まさか…瑠樹、あなたまでだなんて…いいわ、2人揃って私が肅清してあげる！』

……………　　ふふふふ　　———　　ふふふふ　　ぞお~~~~~

怜の肅清も嫌だけど、哲の仲間入りするのはもつといやだあ！！

「…瑠樹？ どうした、急にしゃがみこんで…私の尻尾を触るのがそんなに嫌なのか？」

「い、いやいやいや、そんな事はありませんでしゅことよ？」

「ふふつ、なんだその言葉は、この世界の流行語か？」

しゃがみ込んでブツブツ唸っていた俺を心配して、藍が不安げな顔で覗き込んできた。

藍…そんなに顔近付けないでくれ、俺あんまし免疫ないんだから！あれ、でも…待てよ？

「藍の方こそ、俺に触られるのは嫌じゃないのか？」

「別になんともないぞ？ 橙や紫様も触ってくるし、人里の子供達もよく触ってくるからな」

な、なんと羨ましい…橙や紫は家族で女だからいいとしても、人里のガキンチョらめ…

「だから、瑠樹も遠慮する事はないんだ。耳と尻尾はここに居る間はずっと隠しておくからな
触るのなら…今のうちだ。あ、でも耳は勘弁して欲しい…弱いんだ」

若干照れながらも尻尾を俺に向ける藍…ああ、哲…これが、『真の萌え』なんだな…
などど悦に浸ってる場合じゃない、せつかくのチャンス…活かさねば！

「それじゃ…失礼、します…」

—サワツ

「お、おお〜！」

「どうだい？」

「すごい、すごすぎです。絹のような滑らかさと柔らかい弾力！そして、目に焼きつくこの光沢！

これはまさに、一級品を超えた…超一級品だああ〜！！」

テンションが限界突破どこか天元突破してしまった。

それほどまでに藍の尻尾は強烈だった。

最高級のモフモフ感…流石は藍しゃま！ 九尾の中の九尾！！＼（

ハ・ハ）／

「そ、そこまで褒められると…照れる」

ああ、その尻尾をパタパタさせるたびに俺の手に、頬に…尻尾が当たって…

何とも言えない心地よさ…動物好きの俺にとってまさにパラダイスタイム！

「も、もういいかな？…早めに隠した方がいいと思うんだが…」

「（；。口。）ハッ…そ、そうですね…」

「そんな名残惜しそうに見ないでくれ、まるで橙のようだな」

藍は苦笑しながら、何かを呟くと耳と尻尾はなくなり、髪の間から人間の耳が見えた。

「久々に使った人化の術だが…どうだろう？　ちゃんと隠れているだろうか？」

くるつと一回転して、俺に見せる藍…うん、ただ回っただけなのに優雅だ…

「うん、ちゃんと隠れてどこからどうみても、美人な人間の女性にしか見えないよ」

「そうか…（び、美人は余計だぞ…）」

「ん、何か言った藍？」

「いや、なんでもない、なんでもない！　それよりも朝御飯はまだなのだろう？」

私も少しお腹がすいてしまった…」

恥ずかしそうに藍が言った途端、2人のお腹から…

—グウ—

「……… / / /」

赤面して固まる2人。

数秒間の沈黙が数時間にも思えてくる…

「………そ、そうだった！…俺、まだ寝起きのまんまだった！ごめん、着替えるから…」

「あ、ああ、そうだな。私はドアの外で待っているから早く着替えてくれ…」

なぜか大声が出てしまい、藍もいそいそと部屋から出て行った…

こんな事で一カ月大丈夫なのだろうか？？

続く

八雲藍の章 第1話 「藍しゃま、現代入り」（後書き）

カガヤ

「第1章は…八雲藍です！」

藍

「むう、私が現代入りか…」

カガヤ

「あまりヒロインになってる話見た事ないし、それに外の世界の知識もそれなりにあるって事で」

藍

「そうか…しかし、第一話から何やら恥ずかしいのだが…//」

カガヤ

「この程度で恥ずかしがってたらこれから先やっていけないよ？」

藍

「……正直、そこまでの話をカガヤが書けるのか不安なんだが…」

ノア

「期待しない方が良さそうですね」

はやて

「そやね…」

カガヤ

「お前らは自分の小説に戻れえ！！」

藍

「ともあれ、これから先、どうぞよろしく!……ああ、紫様ちゃんと家事してるかなあ……橙はいつも私の手伝いをしてくれるからある程度出来ると思うが……心配だあ」

第2話 「幼馴染と買い物とリア充。っちゃん（前編）」（前書き）

マヨヒガにて…

羽入

「あうあう…なんでボクがこんな事しなきゃならないのですかあゝ
！」

紫

「藍の代わりよ、しっかりと家事していつて頂戴ね」

橙

「だいじょうぶです、神様！ 橙もお手伝いしますです！」

羽入

「あうあう…たまねぎが眼にしみるのですよあゝ！」

神様、家事中（涙目）

第2話 「幼馴染と買い物とリア充。っちゃん（前編）」

なんだかんだで時間の方がだいぶ過ぎていて、俺と藍のお腹も限界だったのだ

ひとまず、買い置きしておいたパンを2人で食べて、藍に家の中を案内して回った。

その後で藍の服や生活用品などを買う為に街に出る予定だ。

藍は外の世界の事を知っているの、ある程度の知識はあると思っただけだ…

台所にて…

「瑠樹…ガスコンロはどこにあるんだ？ この埋まっているのがそうなのか？」

「うち、システムキッチンだから埋め込み式なんだよな」

「おお！ なんだこれは…自動的に皿が洗われていくぞ！」

「あー、それあまり使ってないから…えっと、なんて名前だったか忘れたけど」

「ふむふむ、随分と進歩しているのだな」

トイレにて…

「わきやあぁ〜！！！！？」

「ど、どうした！？」

「る、るる瑠樹…なんだこのトイレは、お尻に何かかかったぞ」

「ああ〜ウォシュレット…も初体験なんだ」

「う、うおしゅれっと？ 何やらよくわからないが、すごくこそば

ゆかった…

ん？ 瑠樹、なぜさっきからこっちを向いていないんだ？」

「……………とりあえず、下履こうか…」

「……………っ！！？……………（プシュ）」

「わわっ！ こんな所で気絶しないで！」

風呂場にて…

「瑠樹、風呂場に…テレビがある！」

「それは父さんが風呂でビール飲みながら野球が見たい、と付けたんだよ」

「ほお…なるほどお…」

「藍？」

「ほお…なるほどお…」

「……………居間にこれよりはるかに大きいテレビあるから、わざわざここで見なくてもいいんだけど？」

居間にて…

「る、瑠樹！ テレビが急に映らなくなった！」

「えっ、どうしたんですか？」

「私がりモコンで見慣れないボタンを押したら、映らなくなったんだ…」

「見慣れないボタン？ あ、これアナログだ」

「あなるぐ？」

「少し前にテレビはデジタル放送でしか映らなくなったんだよ」

「でじたる？」

「…それもわからないか」

「…すまない」

藍に家の中を色々案内して出た結論。

八雲藍は中途半端な外の知識しか持っていない！！

ま、『幻想郷の外の世界』ってのは『この世界』より少し年代ズレてるからな…多分。

そう言えば、この藍はゲームで言えばどれくらいの時期の藍なんだろう？

「藍、ちよつと聞きたいんだけど。何か最近そっちの世界で起こった出来事教えてくれない？」

「幻想郷で最近起こった出来事？ そうだな…博麗神社が天災、いや人災で潰れたな」

つて事は緋想天辺りか、霊夢達は地底には行ってなくて、白蓮達はまだ封印中の時期。

確か…年表的には2009年だっけ、東方W。k iにそう書いてあった気が。

ともかく、それほど昔じゃないわけか…うん、深く考えないでおこう。

「はい、朝御飯出来たから食べよう」

「すまない、世話になりっぱなしで…」

「気にしないでいいさ、こんな美人と朝食食べれるんだから、役得役得」

食パンを食べようとしていた藍の動きがピタリと止まった。

ひょっとして、朝食はパンではなくご飯派だったかな？

「むっ…瑠樹は女性をからかうのが趣味なのか？」

「？　なんでだ？」

「いや、なんでもない…」

藍はそう言って、溜息を付きながらパンを食べ始めた。

俺、何か変な事言ったかな？

その後も無言で朝食は終わった。

たまにブツブツと何か呟く藍が怖かった…のは本人には内緒にしよう。

「瑠樹、私の服を…どうすればいいだろうか。この格好は目立つと思うのだが」

食事の片づけを終え、まったりしているとふいに藍が尋ねてきた。

今、藍は尻尾と耳を消しているので、どこからどう見てもただの美人にしか見えない…が

「その服は、普通っぽく…見えなくてもいいけど。やっぱり違和感ある…かなあ」

「やっぱりか」

帽子は外しているが、やはりどこかキョーンシー映画に出てきそうな道士のような服は目立つ。

困った顔をする藍、母さんの服を貸す…と言うのも手だけどやっぱり藍にあった服を着てほしい、とすれば、手は1つ。

「よしっ、藍。服買いに行こう、服」

「それしかないか…借りるというのも気が引けるからな。しかし、

私はこの世界のお金は…」

「大丈夫。あの駄神が沢山残してくれたから」

と言い、駄神が置いて行つたジュラルミンケースを持ってきて、藍の目の前で開けてみる。

「なんだこの札束は！？　ぎっしりじゃないか！」

「なっ？　せつかく生活費つて残してくれたなら、こういう事に使わないと」

「し、しかし…いいのか？」

「いいも何も、藍は俺が責任を持って面倒見るつて決めたんだから、これくらい当然だろ？」

（今のセリフ、哲や怜に聞かれたら…似合わない。と言われるだろうな）

と心の中で苦笑する。藍は申し訳なさそうに頭を下げながら

「分かった。それじゃ、よろしく頼む」

「あ、でも俺女性の服とか良く分らないな…母さん達の買い物には良く付きあわされるけど」

『溜樹』これ、どう？　派手かな？』

『ああ、いいじゃない？』

『お兄ちゃん、私はどう？』

『ああ、いいんじゃない？』

『……』

『…ん？』

『『お兄ちゃん！（溜樹！）』』

『なんなんだあゝ！？』

……思い出すのは止めておこう……

「だが、私もよくは分からないし、この世界の住民である瑠樹の選んだ服を着てみたいんだ」

藍しゃま……それはある種の殺し文句でしょうか？

やばいつ、上目遣いで言われると……結構くる。

しかも、本人無自覚っぽいし！

でもでも、服は選べても……し、下着は男の俺には無理なんだよ！だから……あつ！

「……そうだ！ 怜に付添い頼もう！」

「怜？ それは瑠樹の彼女、なのか？」

「俺の！？ 違う違う、怜ってのは俺の幼馴染の1人でもう1人いる幼馴染の彼女だよ。」

怜なら藍の事知っても、驚きはするだろうけど、協力してくれると思うよ」

「そうか、それならば頼みやすい、と言う事だな」

ん……普通はここで何か反応あると思うけど。

やっぱり出会ったばかりだからかな……って、ヤバい、哲の変な影響受けてるよ俺……

「瑠樹？ 大丈夫かい？？」

「……はっ！？ あ、ああ大丈夫だ、大丈夫！」

いかん、心の中で orz になってた。

「もう少ししたら怜に……ってそう言えば今日哲とデートとか言ってたっけ。」

確か朝から映画見るとか言ってたな」

しかも時間的にちょうど待ち合わせの時間だった気が…

「それは邪魔しない方がいいだろうな。それに、出来ればやはり瑠樹に選んで欲しいな。」

あまり私の事を色々言うのは良くないだろうし、瑠樹は服のセンスはよさそうだから」

藍も苦笑まじりに言っている。

「ってまたそんな事言ってるし！」

確かに、自分の服は結構選んで買っけど、そりゃ男物の服だからだつての！

「うゝん…（ピンポン）…ん、誰だ？」

休日の朝早くに玄関のチャイム音。

「宅配便かな？ 藍はここにいて」

「ああ、分かった。見られないようにしよう」

台所の奥へ隠れた藍を見て、俺も玄関へと向かった。

「はいはい、どなたですか？」

「瑠樹、あたしよ。おはよう」

「おはよう…って怜！？ デートじゃなかったのかよ！」

玄関を開けるなりに飛び込んできたのは黒いショートヘアに帽子を被った俺の幼馴染。

東光院 怜…何気にすぐ隣に住んでいたりする。

こんな時間になぜ俺の家にいるのか分からないが、すごく立腹だった。

「ホントにあいつ信じらんない！」

「あいつって…哲？」

何やらデートで哲がへましたらしい…いつもの事だけど。

「そう、あいつったら珍しく待ち合わせに早く来たと思ったたら…」

「思ったら…？」

「あいつ、他の女の子をナンパしてたのよ！」

「はあああゝ！！！？」

いや、いくらあいつが軽くてもそこまでするような…妹の弥生にはたまにするか。

「どういう事？」

「あたしが時間よりすこし早く付いたら哲がいて、可愛い女の子と仲良く会話してたのよ

しかも、連絡先の交換まで！」

「してたのか？」

「ううん、そこであたしに気付いて固まってたから…多分したんじゃない？ あたしはもう知らない。」

というわけで、瑠樹…今日相手して」

「いやいやいや、なんでそこで俺が？ なんか誤解な気がするから哲の所に戻ってやれよ」

「誤解も六回もないわよ！ もう信じらんない、彼女と、の待ち合わせで…うつ」

やばっ、泣きそう！ もう哲の奴…本当だったらぶっ殺す所だけど…

でも、怜と彼女になってからナンパはしてないんだけどな。
つと、それより先に怜をどうにかしないと。

「瑠樹もうあたし、どうしたら…うつぐ…」怜！「（ゴンッ）…
きやつ！？」

あ、玄関のドアが急に全開になって、怜の後頭部を強打しちゃった…
うん、冷静だな、俺。

「瑠樹！ 怜はここにいないか？ 怜の気配がしたんだ！ 頼む、
怜に会わせてくれ！」

焦りまくりの顔で飛びこんできた、こいつは九柳 哲
俺の幼馴染で、悪友で、怜の彼氏…今のところは、ただ。

「なあ、哲…」

「なんだ、瑠樹？ やっぱり怜怒ってるのか！？ 頼む、俺に弁解
の機会をお…！！」

「ええい、涙目でしがみつくな気色悪い！…それより、も！」

チヨイチヨイ、とドアの裏を指さす。

ギィーと、ドアが閉まりだし、後頭部を押さえながら涙目で哲を睨
む怜の姿が…

「怜！ ごめん！ 謝る！ 怜を傷つけて本当にごめん！ それに
こんなに泣かせちゃって…」

「泣いたのは… あんたが思いっきりドアを開けたせいだあ…
！！」

「ぎゃあああ…！」

あ、今日は日本晴れだ

なーんて、現実逃避してる場合じゃないよな…はあ、面倒だ。

怜だけなら藍を紹介出来る機会だったのに。

ま、哲にもいずればれる事になるだろうから、2人まとめて紹介した方が手間かからないか

「2人共…とりあえずあがりなよ。夫婦漫才はそこまでにしてさ」

「だ、誰が夫婦漫才よ、誰が！」

「どっちと言えば…一方通行なド突き漫才、だな」

・
・
・

居間

「それで、哲…怜に釈明は？ 大体の事は聞いたけど、お前の事だからどうせ違うんだろ？」

「おお…流石はマイ親友！ 話が分かる！ そうだよ、違うんだよ 怜！」

「何が違うのよ。あんなに可愛い子にデレデレしてたじゃない！」

「いや、その…実は…」

哲曰く、珍しく早起きしてしまい、たまには早めに待ち合わせに行こうかとした所。

初めてこの街に来たという子に道を聞かれて、答えたついでにこの街の見どころや、名所などを色々話してるうちに怜が来たらしい。

ちなみに連絡先の交換は向こうから言いだしてきた事で、哲にはそんな気はなかったとか

「でも、携帯出してたじゃない。今にも交換しだしそうだったじゃ

ない」

俺の隣に座り、じーっと対面の哲を睨む怜。
でもさつきよりは心なしか怒りが収まっている。

「それは…だな」

なぜか哲はチラチラと俺の方を向いてきた、はてな？

「実は…教えようとしたのは瑠樹の連絡先で…今日お前暇だろうか
ら、俺の代わりに…」

「はあ…つまり、デートがある自分の代わりに、俺にその子に街の
案内頼もう…としたわけか」

「イエー ス でもお前出なかったからな、メールしておこうかと
思ったんだよ」

「あ、俺携帯部屋に置きっぱなしだった…」
(朝から色々あったからなあ)

部屋に戻って携帯を持ってくると、確かに哲からの着信があった。

「これで誤解は…解けただろ？」

「紛らわしい真似してたのは事実じゃない…デレデレしてたし」

「俺が怜以外にデレるわけないだろ！ そりゃあの子は可愛かった
けど…だからこそ瑠樹にだな」

「俺に飛び火させないでくれ…」

「まったく…ようは俺へのお節介を誤解したってわけか。」

しかも、怜の後を追いかけたから、その子を置いてけぼりにしたみたいだし…可哀相に。

「……もういいわよ。あんたの話ちゃんと聞かなかったあたしが悪いんだし」

「いや、俺の方こそ、ごめん……でも、俺は怜の彼氏だ。怜以外にうつつは抜かさない！」

「ちよつ、わかったから。て、手を離しなさいよ！」

「俺が手を掴む女性は……こんなに綺麗な手をした怜だけだ……」

「……っ、ああ、もう分かったわよ哲！ あたしもこんなにいい彼氏を疑って……ごめん」

幼馴染の妹には本能でデレデレしてるけどな……なんて、言うほど俺はKYじゃない。

というか……俺が空気だ。目の前で手なんか握りやがって……しかも、2人とも顔真っ赤で

チクショー、何しに俺の家きたんだこいつら（涙）

「あー、コホン……2人共、メロドラマをやりたいのならどこぞのテレビスタジオに行ってくれ。

俺が好きなドラマは刑事ドラマで、こんなラブラブでお熱い青春ものは見ないんだけど？」

「……うつ、ごめんなさい」

2人綺麗に揃ったお辞儀をするな！ 息びったりすぎるぞバカップル！！

「……もう、いいや……とつとこつちの用件もすませよ……」

「こつちの用件？」

「瑠樹もあたし達に用事があるの？」

「……これからデート行くのもいいけど、映画も始まってるし。少し待っててくれ……」

かなり脱力し、よろよろになりながらもどうにか隠れている藍の元へとやってきた。

「…大丈夫か、瑠樹？」

心配そうに俺を見る藍の顔が…最高の癒しになった。

「もう、大丈夫！ 藍の顔を見たらすつきりしたから！」
「そ、そうか…ならよかった」

我ながら…なんて現金な性格なんだろうね。

「それで…まさか、2人に私の事を？」

「ああ、こういうのは早めに済ませた方がいいだろうし。大丈夫、哲も信用できる人間だから」

「そう、みたいだな…あれほど、彼女を大切に思ってるのだからな」

どうやら、藍の目からも哲の心の底の良さが分かったらしい。
良かった、表面上はただの変態だからなアイツ…

「ともかく、耳と尻尾を俺が2人に紹介したら、出してくれないか？」
「うん、わかった」

スーハー、と2人して軽く深呼吸、しかも同時に。
そして、2人して顔を見合わせ笑いだした。

「ぷつ、俺ら何をこんなに緊張してるんだろっな」
「ははっ、全くだな。では、行こうか」

こうして、俺は藍を紹介するために台所から居間へと向かった。
自然と、藍の手を引いている事に気付かないまま…

「お、瑠樹！ 誰だその美人さんは！ なんだかどこかで見たような服してるな…」

「うつわあゝすごい綺麗じゃない…瑠樹の親戚の人？」

「うーん、残念、ハズレだ怜。それじゃ2人に紹介するぜ…この人は…」

「はじめまして、私の名は…八雲藍。幻想卿に住む、九尾の妖狐だ」
ポンツと、さつきまで消していた耳と尻尾を2人の目の前で出して見せた。

あ、あれ？ 反応がないな？

「瑠樹…2人共、固まっているぞ？」

「……おい、2人共？」

顔の前で手をパタパタさせても反応なし。
が、すぐに2人の体がピクリと震え…

「「ら、藍しやまだつてえ〜〜〜！！？」」

2人の大絶叫が家じゅうに響き渡った。
哲、男が藍「しやま」言うと気持ち悪いぞ。

俺もさつき言っただけ…

続
く

第2話 「幼馴染と買物とリア充。っちゃん（前編）」（後書き）

カガヤ

「はい、悪友と幼馴染登場しました！…うん、バカカップルめえ」

哲

「おい、作者！ 散々ヒドイ扱いしてくれたな！俺のどこが変態だ！」

カガヤ

「まあいいじゃないか…こんなにいい彼女持つてるんだし、+-0
だろ？」

怜

「うう…初めての出番から散々な目にあってるわよ、あたし…」

カガヤ

「駄神よりマシだろ？」

怜

「そ、それはそうかもしれないけど…」

哲

「しかし、流石は紫様！例え強い神様でもこき使う、そこにしびれる懂れる！」

怜

「へえ、羨ましいんだ？…なら、あんたはあたしが一生こき使ってあげるわよ！」

カガヤ
「それ、なんてプロポーズ？」

第3話 「幼馴染と買い物とリア充いっちゃえ (後編)」 (前書き)

今日のマヨヒガ

紫

「ねえねえ、駄神さん」

羽入

「だ、駄神…」

紫

「藍が行った世界、行く事は出来なくても見る事は出来ないの？」

羽入

「ふふん、ボクの力をもってすればおちやのこさいさい、なのですよ」

橙

「わぁーい、藍様の姿が見えますー」

第3話 「幼馴染と買い物とリア充いっちゃえ（後編）」

Side 怜

「「ら、藍しゃまだつてえ〜〜〜!!?」」

台所に行った瑠樹が突然連れてきた女性を見て、あたしと哲は思わず大声を出してしまった。

だって、そうでしょう？ いきなり目の前にゲームのキャラが現れたのだから。

…でもあたし、藍しゃまの事良く知らなかったりする。

最初は、哲が瑠樹に東方シリーズを進めて、瑠樹がじわじわとハマりだして…

あたしもいつの間にか、興味湧いて二。二。動画や同人誌（健全な方のね）を哲に見せてもらって

東方本編を全くやらないのに、登場キャラの事に詳しくなっちゃったのよね。

で、思わず藍しゃまって口走ったけど、結構恥ずかしい…瑠樹の呆れたような目は気にしない。

あれはきつと、哲に対して『だけ』の視線よね、うん。

それにしても…瑠樹が女の人、それもこんな美人を私達に紹介するなんて……

「…藍、しゃま？」

「あ…噛んだだけ、と思った方がいいよ？」

藍しゃ…藍さんがぼかーん、として瑠樹がフォローしているけど、冷静に考えたらそりゃそうよね

見ず知らずの人に様ならともかく、しゃまだもんね。

「ご、ごめんなさい。いきなりの事でちょっと混乱しちゃって」
「いや、その辺りは理解しているつもりだ。私自身もまだ混乱しているからな」

苦笑する藍さん、美人ってどんな姿でも絵になるのね…

そして、瑠樹に事の事情を説明してもらったけど、正直信じられない事沢山。

「神様がミスして、この世界に…それなんて転生もの？」

「言っなよ、俺もそう思ったけど」

あれ、さっきから哲が静かね。

てつきり二次元キャラに実際に会えて狂喜乱舞していると思ったのに。

そう思いながら哲の方を見ると…

「ブツブツ…1カ月藍しゃまと、美人と2人きり…死ね、リア充！」

何かブツブツつぶやいているかと思ったら、突然目をクワッと開き瑠樹に襲いかかった。

で…当然黙ってやられる瑠樹でも、それを見過ごすあたしでもなく

「お前に言われたくない！」

「あたしみたいな彼女いるってのに、何ヤキモチ焼いているのよ！」

瑠樹はカウンター気味に右腕を伸ばし、哲の首元に腕をかける。

あたしも左腕を伸ばし、哲の首の後ろめがけて突進した。

「グヘッ!？」

「おおゝ見事なクロスボンバー…」

これぞあたしと瑠樹の対哲制裁必殺技『クロスボンバー』

元ネタは当然、アレね。

でも、藍さん…良く知っているわね、幻想郷にもキン肉マンあるのかな？

「コホン。えつと…大変お見苦しい所をお見せしました!」

「いやいや、気にしないでくれ。君達は本当に仲がいいのだな」

哲に代わって藍さんに哲の暴走や、思いっきり制裁を加えちゃった事も含めて頭を下げた。

瑠樹も頭を下げている、ちなみに哲はまだ転がっている…久々だから決まり過ぎたかな？

「これでもかれこれ5年以上からの付き合いだから」

「小学校から一緒のクラスだもんね、扱いも慣れちゃっわよ」

もう瑠樹や哲と知り合って5年以上が経っている

瑠樹達はあたしよりも早く知り合っただけ、そして…今の腐れ縁になる。

途中、色々あって一時期絶縁状態寸前だったけどね…

「そうそう、まさか同じ高校に受かって同じクラスになるなんて思わなかったしな」

「「相変わらず復活の早い奴」」

この哲の復活の早さにももう慣れっこだ…でなきゃ、こんな奴に惚れたりしない／＼

そんなあたし達を藍さんは本当に微笑ましく見つめている。

「少し、羨ましいかもしれないな…」

と、呟いた声はあたしにしか聞こえなかったみたいだけど。

「で、2人共これからどうするんだ？」

そうね、誤解も解けたし…まだ時間も早いからデートの続きしてもいいんだけど…

「気分じゃないし、今度また仕切り直して事で」

「ええ」

途端に、哲が隣でしょげた犬みたいな顔で文句を言ってきた、少し可愛いかも…

「ブツブツ言わないの。今回の失態は次に挽回の機会与えてあげるから」

「俺だけが悪いわけじゃないと思うけどなあ…」

「な・に・か？（ニコ）」

「ナンデモアリマセン、サー！」

うむ、よろしい。

「哲はしっかりと怜に尻に敷かれているようだな」

「うーん、カップルになる前からこうだから…」

「…何と言うか、よく耐えてきたな瑠樹」

「ありがとう、藍…」

何か瑠樹と藍さんが言っているけど、聞こえない聞こえない。べ、別にあたしだって自覚ないわけじゃないのよ？

でも…仕方ないじゃない。あたし達カップルなんだし…

それに、下手に氣遣われるよりはいいわ、特に瑠樹相手にはね。

「せつかくなんだし、藍さんに街を案内してあげましょうよ？」

「お、それ名案！」

「せつかくの休みなんだ。2人で過ごした方がいいのではないか？」

「いいんですよ。さつきから見苦しい所ばかり見せたお詫びですし、瑠樹もいいでしょ？」

「2人がいいならお願いしたいけど…あ、それならちょうどいい、実は怜に頼みたい事があつたんだ」

そうして、藍さんの衣服の問題を聞き、あたしはすぐに快諾した。

確かに、いつも葉瑠さんや弥生ちゃんの良い物に付き合わされるとは言え、

瑠樹だけじゃ藍さんの服を決めるのは難しいかもね。

そう思うあたしの頭に1つの計画が思い浮かんだ…これは名案！

早速哲にも後で教えなきゃ♪

「分かったわ、それじゃ街の案内がてらに藍さんの服とか色々買いましょう」

「ありがとうな2人共、助かる」

「せつかくの休みに、申し訳ない」

「いやいや、こんな美人の為な…グホッ！？」

一言余計だったの、哲！

こうして、私達は藍さんの服などを買いに街へと繰り出したわけだ
けど…

藍さんが意外にこの世界の常識を知っていてびっくり！

なんでも、主である紫さんと一緒に幻想郷の外の世界を見物した事
がいくらかあるみたい。

でも、瑠樹曰く…

「デジタルテレビとか最近の技術のものはあまり詳しくないみたい
…」

うーん、ともかく基本的には問題なしでいいわよね？

それにしても、とあたしの服を着ている藍さんを凝視する。

今の藍さんは尻尾と耳を隠しているので、普通の金髪美人に見える。

あたしも…まー割と自分の容姿には『多少』自信あったけど、藍さ
んはそれ以上ね。

よく弥生ちゃんがあたしの服を着て

「……胸がぼがぼお、ええい！ 怜姉の胸は化け物か！」

って言われた事もあるほどに、大きい（特に胸が）サイズの服だけど
藍さんは見事にばっちり着こなしている。

『胸が少しキツイ』

と言った時は哲が鼻血出して制裁くらわせたのは…うん、八つ当た
りじゃないわよ？

「ん、怜。私の顔に何か付いているのか？」

「ううん、なんでもないなんでもない」

「大方、怜ですら藍に見惚れてたんじゃないか？」

あはは、って笑っているけど瑠樹…藍さんの顔真っ赤よ？ 気付いてる？

「る、瑠樹…そんな事はない。怜の服のセンスがいいだけだ」

「それもあるけど、でも、それを着こなす藍が綺麗すぎるんじゃない？」

…なんだろう、この会話。さっきのあたし達へと仕返し？

「パルパルパルパル…みぎゃ！ れ、怜！ 足踏んでる！？」

「ふんだっ」

で、あたしの彼氏は彼氏でそんな2人の様子を嫉妬全開で睨んでるし…あんたはパルシイか！

そんなこんなであたしがよく行くショッピングセンターに着いて、早速行きつけの店へ

「怜ちゃんじゃない！ こんにちは、今日は哲くんと瑠樹くんも一緒なのね」

この店はあたしだけじゃなく、瑠樹のお母さんである葉瑠さんや弥生ちゃんもよく来るので

哲も瑠樹もすっかり顔なじみになってしまつて、ここの店員さん…ナオミさんとも友達になっている。

「はぁ…いい、ナオミさん。今日もスマイル可愛いね」

「あらありがとう」今日は3人でデー…ト、あら？ あの美人さ

んは誰かしら？」

店の入り口でショーウィンドウに飾られた服を、瑠樹と見ている藍さんに気付いた。

藍さんはどこか感心したように見えて、瑠樹が苦笑している。

「ああ、あの人は藍さんと言って、事情があつてしばらく瑠樹の家に住む事になったのよ」

ナオミさんは東方とかそれ系の事にはさっぱりなので下手に本当の事を言うよりも、多少誤魔化した方が良く3人で話しあっていた。

「へえ、あの瑠樹くんの家に……って、葉瑠さんや弥生ちゃん達今旅行中じゃなかった!？」

「そうそう、今は……どこから辺かな。何せ世界一周旅行だから」

そう、瑠樹の家族はみんなで世界一周旅行中だ。

瑠樹がクジで当てただけで、3人までだから高校を休めない瑠樹が残ったわけで……

旅行当日には葉瑠さん達が瑠樹の事すごく心配して、何度もあたしや哲に瑠樹の事頼まれたっけ。

「つていう事は……今、瑠樹と藍さん。二人っきりの同棲生活？」

「そうなるなあ……羨ましい限りだ」

「哲？　でも、藍さん家事得意だからちょうどいいかも」

「ふーん、1人残った瑠樹が心配で葉瑠さんが頼んだ家政婦さんみたいなものかしら？」

「そ、そんな感じそんな感じ」

ナオミさんはそれ以上深く追求してこなかった、こういう所は助かるのよ。

でも、口元には怪しい笑み浮かべてる…こういう時は少し危ない。

「ねえ…あの2人。知り合ってどれくらいなの？」

「えっと…まだ、少し？」

ナオミさん、なんだか目がきらきら輝いてますよー？

「その割にはなんだか仲よさそうよねえ？」

「あー…そう、ですね」

何となくナオミさんの言いたい事が分かった、あたしと同じ事を考えたみたい。

「その顔だと、怜ちゃんも同じ事考えてたみたいね…」

「うん！」

「あの2人、お似合いだからくっつけちゃおう！」

イエーイ（＊）人（＊）イエーイ

なノリでハイタッチを交わすあたしとナオミさん。

店内のお客さんが何事かと、一斉にこっちを向いた事で急に恥ずかしさが増して

「コ、コホン」

2人揃って咳払いして冷静さを取り戻す…うう、汚点だね。

「…2人共何してんのさ」

「随分と楽しそうだったな、2人は姉妹なのか？」

呆れかえった瑠樹と微妙に勘違いしてくれた藍さんが店に入ってきた。

それと、ナオミさんとあたしはよく姉妹にまちがわれるけど、親戚ですらないのよね、残念。

「オホホホ、なんでもございませんわお客様、ささっ、じっくりとご覧になっておくんなまし♪」

「ナオミさん、言葉がすごく変…」

ジト目で冷たい視線を送る瑠樹を冷や汗ながしながらも、無視してナオミさんは仕事に取り掛かった。

「話は怜ちゃんから聞いたわ、藍さんに似合う服を買いに来たのよね？」

「ええ、お願いします。ナオミさん」

「よろしくお願いします」

「まっかせなさあゝい…とりあえず、こちら辺から…」

と、ナオミさんがまず手に取ったのは…

「なんで水着…しかもビキニ」

「さ、さすがにそれを普段着にするのは抵抗が…」

藍さんは一応マジマジと見て、自分の体にあててはいる。ナオミさん、最初っから直球だな、でもアレはだめ。

「あれ？ 夏らしい服装でいいかと思ったのに」

「夏らし過ぎだあ！ もっと違うの！」

「もう、ナオミさんったら…次はあたしが選ぶわ」

瑠樹の言う通り、違うのじゃなきゃダメ…と言っわけであたしが選んだのは

「ナオミさんたまにふざけて選ぶからなあ…怜なら藍に似合っいい服選んでくれそう…」

「じゃあ藍さん。こっちはどう？」

ミ（ノ——）ノ〃3 ドテツ！！

あれ？ 瑠樹が見事にすっころんでしまったわね…そんなに驚く事かしら？

「怜…また水着かい！」

「またって違うわよ。あたしが選んだのは…これよ、モノキニワンピース水着！」

藍さんは…悔しいけど、確かに胸が大きいわ！ でも藍さんの魅力はそこだけじゃない！

ボディラインもしっかりしてて足も細い！ これを見せつけないわけにはいかないわ！」

「なるほど、確かにこれは貴重なボディラインね…流石は怜ちゃん！」

ナオミさんが横でうんうんと頷いている、一応それでもプロの店員さんなんだけどねえ…

「だからこそ、これ！ ワンピースのようだけど、真ん中がスパツと開いていて

尚且つ後ろから見るとビキニのようで、藍さんの魅力がこれで300%増しに…」

「水着から離れんかい!!」
「きゃん!？」

あたしの熱い演説をしていると、少し顔を真つ赤にした瑠樹に思いつきり叩かれた。

女の子には優しいけど…あたしには容赦しないのよね、瑠樹は…

「きゃん! じゃない! 何さつきから水着ばかり勧めてるのさ、藍を見なよ!」

「……………(プシュー)」

「…あつ」

「自分が着た姿想像して…オーバーロードしたっばい」

りんごのように真つ赤になった藍さんが固まってる…意外とウブ? おかしいなあ、確か酔っぱらったりテンションあがると脱いじゃうのが藍さんのはずなのに

だからこういう水着ならイヤイヤながらも進んで着そうと思ったけど

「怜、言っただけけど…この藍はニコニコ動画とかの藍と同一視しない方が良くぞ?」

瑠樹に小声で言われて納得した。

確かに、この藍さんは違う…家で話してた時にもうすうす感じてた事。

例えば橙の話をする時も、割と普通に話していて、暴走したりする事もなかった。

きつと…ニコニコ動画や同人誌に毒され過ぎたのね、あたし…反省。

「でも瑠樹くん…さつき君がこんな水着は似合わないと言った藍ちゃんに

『どんな水着でも藍なら似合いそうだな…モデルみたいに綺麗な
だし』

って呟いたのが原因の半分以上だとお姉さんは思うなー」

「な、ナナナオミサン!？」

瑠樹、あんた…あたしの熱演中にそんな事言ったのね…

はあ…こんなフラグ立てるくらいならもっと学校とかでも立てられ
ばいいのに…

「と・も・か・く! 藍に合う『普通』の『一般的』な服をお願い
!」

「はあゝい(´・ω・｀)」

顔を赤くしながら軽く殺気だった瑠樹に、仕方なくあたし達はそれ
ぞれ服を見て回った。

「あれ、そう言えば…哲は？」

なぜかさつきから物足りないと思ってたら、こういう話に真っ先に
飛び付くバカがいなかった。

どこにいるのかとキョロキョロと辺りを見渡す。

結構品揃えが豊富なこの店は結構広い。

「哲くんならレジにいるわよ」

ナオミさんの言う通り何かレジで買い物をした哲がこっちへ来た。
この店は男物や装飾品も揃えているから、何か気にいったのがあっ
たのかもしれない。

「哲、一体何を買ったの？」

「ああ、これさ…はい、怜」

哲があたしに差し出したのは…青いペンダント。
これは、以前にデートの時の…

「怜、これ前来た時に欲しがってたろ？ あの時はお金あまりなかったから買えなかったけど

今日デートしたら買うつもりだったのさ。それに…お詫びも兼ねて、な？」

照れくさそうに笑う哲を見て、少し涙が溢れてきた。

確かに欲しがったけど、これ結構高いペンダントなのに…しかも、この前と言っても数か月前の話だ。

「覚えててくれたんだ…」

「当たり前だろ、彼女の欲しいものはばっちり覚えておくさ！」

「ありが、とう…ありがとう、哲…」

笑顔で親指を立てる哲…やばい、かつこいい…

「えっと、こっちなんでどうかしら？」

「あ、これはいいかも。藍、どう？」

「これはいい！ 問題はサイズが合うか…試着室を使ってもいいだろうか？」

「誰かさん達のせいで店内暑くなってるから、狭い試着室だとキツいかもしれないけど、どうぞ」

「そうだな…この服は涼しそうだからぴったり…でも、ないか。これでもまだ暑そうだ」

「エアコンの温度を下げた方がいいんじゃない、店員さん？」

「俺も俺も…」

「ママー…あそこら辺から暑い空気来てるよ」

「もう少し我慢してね、今エアコン下げてもらうから

「……………／／／／／」

瑠樹や藍さんだけでなく、他のお客からも次々にあついあついと…

あぐくのはてに小さなお子様にまで…

つてか、藍さん…あなた順応力高すぎない？

その後、結局藍さんの服はナオミさんが選んでくれて

あたしと哲は湯気が出るほど真っ赤になりながら、店の隅っこで縮こまっていました…

100%自業自得だけど、瑠樹と藍さんの為に考えたあたしの計画があゝ！（／□、）

S i d e o u t

続く

第3話 「幼馴染と買い物とリア充いっちゃえ（後編）」（後書き）

カガヤ

「お待たせしました！m（。・。・）m ペコペコ...」

瑠樹

「...暑さでバテバテだったもんな」

カガヤ

「それに週末はここんとこ実家に帰りまくりだったし」

哲

「でも、しばらくは土日空いてるからいいんじゃないか？」

カガヤ

「そうだといんだけどなあ...後は俺の気力次第（汗）」

怜

「大丈夫なの？」

カガヤ

「藍編は全部構想出来てるから問題なし♪ 皆さんも夏バテ、熱中症には気を付けてくださいね！」

一同

「ではまた次回！」

第4話 「最後の、夏休みの始まり」 (前書き)

今日のマヨヒガ

紫

「……ねえ、これはどういう事なの？」

羽入

「……はい」

橙

「……また藍様眠っています…」

紫

「1日1回しか映らなくて、しかも向こうの時間はランダムってど
ういう事よ！しかも毎回深夜とか藍が眠っている時間帯にしか繋が
らないし！」

羽入

「あうあうーそんな事言われても、これが限界なのですう」

橙

「でも、藍様…いつも幸せそうな寝顔してます」

紫

「そうね、こんなに幸せそうな寝顔あまり見た事ないわね。しかも
日が経つにつれてますます幸せそうになっちゃって…これは面白い
事になりそうね」

第4話 「最後の、夏休みの始まり」

「ついに来たな…」

「ああ…」

「長かったな…」

「今日からいよいよ…」

「」「」「夏休みだあゝ!!」「」「」

クラス中から歓声が上がる。

それもそのはず、今日から夏休みになったのだから。

「はあ…なんで、こうバカしかないわけこのクラスは」

後ろの席に座っている怜が思いつきり溜息を吐きながら、手に頭を当てて沈んでいる。

「嬉しいだろ、夏休み」

「そりゃ、あたしだって嬉しいけど。でも…ここは小学校か!」

怜の指さす先には哲を中心として、なぜか踊っている男子生徒達。他の女子達は見慣れているので、無視するか一部には手拍子したりしている。

「瑠樹は混ざらないでよ、頼むから」

「混ざるわけないだろ」

苦笑しながら答えるが、怜はなぜかじつと俺の方を見てニヤニヤしている。

「あ、そっかゝ家には藍しゃまがいるからウキウキな夏休みよね？」
「そうだな、朝起きて朝食が出来ていて、夜帰ると夕食が出来て、
つてのはいいよな」

それに藍の作る御飯美味しいんだぜ？ 和食中心だけど洋食も得意だし」

藍が来てから、数日、俺の短期間1人暮らしは変わった。

前まではギリギリまで寝て、朝はパンなどの軽食で済ませて、昼は購買の弁当

夜は気が乗れば簡単な食事を作るが、それ以外はスーパーの惣菜だった。

それがここ数日は違う。朝はちょうどいい時間に藍が起こしてくれて昼は藍特製の弁当を哲や怜達と食べる。

この時哲が物凄く羨ましそうにしてくるが、自分は怜特製の弁当を食べている事実を忘れている為

怜から制裁を受ける事になるが…それもいつもの事。

そして、夜…今まではどこかに遊んでから帰る事が多かったが、藍を1人でいさせたくない…

と思い、学校が終わればなるべく早く帰って来た。

友達から誘われた時は断るか、ほどほどに付き合うようにしている。哲や怜に誘われた時は一度帰ってから藍も連れて遊びに行くようにしている。

あの買い物をしてから数日で、俺達4人は昔からの親友のような関係になった。

『本当に、いい子達だな…もちろん、君も含めてだ』

といたずらっぽく笑った藍の笑顔が、なぜか頭にこびりついている。

「と、ここで瑠樹くんのお…夏休みの予定を聞きましょうかあゝ」

「！」

「無駄にハイテンションになったバカが俺の前に現れた。
どうしますか？」

殴る

叩く

蹴る

↓ 怜とのツープラトン」

「ちょ、ちよつとまで…なんでコマンド形式、しかも攻撃的なもの
かな…ハブッ!？」

ノートを丸めて、怜と2人で左右同時に哲の頭を連打した。

「せ、せめて一発に…しろうや…がくっ」

「相変わらずあんたらしいコンビネーションね」

呆れるような声を出すのは、高校に入ってから友達、河東葵だ。
かとう あおい

「葵も混ざる？ 気持ちいいわよ？」

「んじゃ、葵は脳天担当で」

「面白そう、一度やってみたかったのよね」

「までまでまで、なんで葵まで混ざる事に…って葵も普通にノート
を振りがざすな！」

スパーン

「んで、改めて聞くけど瑠樹、夏休みの予定は？」

「うーん、考え中…藍をどこかに連れて行きたいんだけど、いい所
が浮かばなくてな」

「せっかくこつちに来てるんだもの、家にずっとじゃお姉さん、可哀相よ?」

ちなみに葵も藍の事を『大体』知っている。

というよりクラス中、藍が俺の家にいる事を知っている。

哲がうつかりバラしてしまったのだ、最も藍は『俺の遠縁のお姉さん』と言う事にはなっているが。

おかげで嫉妬にかられた男子生徒数名から強襲を受けた。

まあ、全員返り打ちにしたけど、ついでにこの前の哲と怜の騒動を話したが

『哲がこの前可愛い子ナンパしそうになったせいで、怜が泣き出してデートが出来なかった』

と、俺の代わりに哲がボツコボコにされたらしい、主に怜ファンクラブの面々に…

「多少」話してない部分はあるが、嘘は言っていない、言っていないって言っていない。

「だったら、久々にあたしの別荘に行かない?」

「おっ、いいな。それ!」

「怜の別荘は中2の時以来かな…」

それでも怜の家はなかなか金持ちなのだ。

俺と哲と怜は、小学校時代から毎年怜の別荘に遊びに行っていた。

弥生も行った事があり、海が綺麗でなかなかの絶景な場所に建っている。

去年は受験勉強があるからと、流石に行きはしなかった。

でも、怜の別荘はいいな…海があるのが特に。

「父さんが昨日言っただのよ、今年は別荘行くのか？　ってね」

「なるほど…あ、葵はどうする？」

「私は、ごめんなさい。色々予定詰まってるから」

葵は申し訳なさそうに頭を下げた。

この『予定』の中には…彼氏とのデートも入っている事を俺達は知っている。

「そっか、それじゃあ仕方ないわね」

「うん、そういうわけだから今度誘ってね、それじゃおっさきに」

みると校門に他校生徒である葵の彼氏が見えた。

うきうきしながら走り去る葵の後姿は、どことなく羨ましかった。

「俺も今年はパスするかな…2人で行ってきたらいいよ」

思えばここ数日、藍が来てから哲と怜はまともなデートもせず、俺や藍の為に色々してくれた。

買物に付き合ったり、遊びに誘ってくれたり色々だ。

正直かなり助かっていた。藍のような美人と2人きりというのは時間が経てば経つほど

気が持たなくなってきたからだ…こういうのを煩惱って言っただな…

それに、藍を連れて行くのは別荘でなくてもいいからな。

「……………」

…あれ？　返事がないと思ったら、2人は互いに顔を見合せたままじっと固まっている

なんかこう頷き合ってるし、変にシリアス顔になってるし!？

「あーそんなの気にしないでいいんだぜ？」

「そうそう、あたしも哲も好きでやってるんだし。それに藍さんももう友達なんだし、ね？」

（こういうイベントでもなきや2人の仲進展しなさそうだもんね）
（うんうん、今までなんか瑠樹と藍さん、微笑ましい姉弟にしかみえなかったもんね）

なんだか、ボソボソ2人が呟いているけど、よく聞こえない。

こうして、夏休みは怜の別荘に行く事が決まった。

勿論、宿題持参で…

「別荘か、いいじゃないか。3人で行ってくるといいよ」

「いやいやいや、藍も一緒だから」

その日の夕食時、今日も藍特製の肉じゃがをつまみながら藍に夏休みの事を話した。

夏休みは怜の別荘に行くと言ったら、我が家の藍しゃまはこんな事を言っちゃいました。

「はっ、私は…留守番ではないのか？」

「なんでそうなるのさ！」

心底驚いた顔で藍が俺をみる。

「私は居候だぞ？　ただでさえ瑠樹達に遊びに誘ってもらっているのもおこがましいのに！」

…変な所で律義と言うか頑固というか…うん、面倒だ、てっとり早くいこう。

「俺が藍と一緒に、海に行きたいんだよ！ 幻想郷には海ないだろう、だから…藍に海見せたくて…」

なぜか言ってるうちに恥ずかしくなって小声になった、なんでだろう？

「あ、いや…うん、嬉しい、よ…確かに私は海をみた事はあっても行った事はない、からな」

なんでそこで顔を真っ赤にしちゃうかな、この藍さんは！

「でも、私は式神だ。水に濡れたら式が落ちてしまうぞ？」

あ、そっか。こっちの世界にいても繋がりを感じないだけで、紫さんの式って事には変わらないんだっけ。

風呂に入る時もシャワーには気を付けてるようだし、藍曰くシャワーは大丈夫だけど

川などの勢いのある流水だとれやすくて危ないのだそうだし、しかも、ここは式を貼り直す紫さんはいない。

「でも、せつかく式とか関係なく自由なんだし、藍も不自由なく遊べればいいのに」

「ありがとう、瑠樹のその心遣いはよく分かるし、嬉しいよ。ただ、こればかりはな…」

嬉しさの中に少し寂そうな笑顔を浮かべる藍、そんな表情似合わないってのに！

なんとか出来ないかと深く思案にふけっていると…

「じゃじゃじゃん！！ 困った時の神頼み、なのですっ」

久々に駄神が現れた、しかもテレビから。

「あ、アレ… 2人共。なんでノーリアクションなのですか？ おかしいですねえ…

テレビから出てくるのが今時の神様の出現方法だって紫さんから聞いたんですけどねえ」

どこぞの呪いのビデオ風に、テレビの画面から上半身だけ飛び出て来た駄神の姿が…

「いやいや、それなんて貞子？」

「…… 確か、幻想郷にそんなビデオが流れてきたような気がするが… 紫様…」

呆れかえる俺らに、驚かなかった事にショックを受ける貞子っぽい羽入姿の駄神… なんだこれ。

「えー、こほん。それでは仕切り直しまして… 今日私が来たのは他にもありません！

実は藍さんにとつても素敵なプレゼントがあるんです！」

「私に？」

「ぱっぱかっぱんぱーん！ 神様ボトルっ」

駄神が袖口から取り出したのは小さな小瓶、中に液体が入っている。

「今のはひょっとして、ドラえもんっぽくしようとしたのか？ しかも、旧声優版の」

「に、似てませんでしたか？」

あれで似ていたつもりらしい、俺の指摘にびっくりしている。
藍がまあまあ、と慰めようとしたが、少し神様はブルーになったようだ。

「それで、神様。これはどのような？」

「はい…この液体には私の力が籠められているんです。これを飲めば、川だろうがなんだろうが
へっちゃらです！ ついでにうっかり耳や尻尾が現れる事もないので、どこへ行っても大丈夫！」

V(=U—U=) と満面の笑みでピースを送る駄神。
少し、うざいと思ったが、今回はえらいえらいをしておこう。

「よくやった！ これで藍は何に気を付ける事もなく人前や海に出れるぞ！」

「えへへ、もつと褒めて欲しいのです」

「…あ、ああ、そうだな。これで…私も海に入れる。ありがとうございます！」

やっぱり海には興味があつたようで、藍はしきりに駄神に礼を言っていた。

これで、別荘への準備をするだけだな…

あつ！ そう言えば忘れてた事が1つ…

「瑠樹…明日は暇か？」

「あ、ああ…暇、だけど？」

藍も気付いたらしく、顔を赤くしながら俺に明日の予定を尋ねてきた。

「なら、ナオミさんの所へ行きたいんだが…私の水着選びに付き合っ
てほしいんだ」

……この前買っておけばよかったかな。

と少し後悔しつつ、藍の様々な水着姿が見れると思うと、鼓動が嫌にでも早くなるのが分かった。

「…青春ですねえ」

ニヤニヤしている駄神は殴っておいた。

こうして、俺の『最後の』夏休みは始まった。

続く

第4話 「最後の、夏休みの始まり」（後書き）

瑠樹

「ちょっと待て！なんだこの終わり方とタイトルは！」

カガヤ

「いやあゝ…伏線？」

藍

「気になるじゃないか…とても不吉だぞ」

カガヤ

「それは、後々分かるって事で…それにしても式が落ちる云々は…
独自表現と言う事で、あまり意味分かってないんですよえ」

藍

「表現も様々だからな、公式資料のどこかには書いてあるかもしれないな…」

カガヤ

「うーん、それは仕方ないという事で…ではでは、また次回！」

第5話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだぁ！！？」（前書き）

今日のマヨヒガ

羽入

「あうあうもつるゆひてほしいのれすう」

紫

「だゝめ、前回私達に内緒であつちに行った罰よ」

羽入

「この身体は辛い物は苦手なのれすう」！

橙

「ハバネロもあるので神様どーぞ」

第5話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだあ！！？」

とある海岸 怜の別荘

「海だあ！」

「…う、海だあ」

「水着だあ！！」

「…み、水着だあ／＼」

「…藍さん、別に復唱しなくていいのよ？」

「なっ！？ 哲が海に来たら必ず叫ばなければいけない事があると…違うのだろうか？」

「「お前は何大ウソ吹き込んでるんだあ！！！」」

瑠樹&怜 ツープラトン発動！ ダブルアッパーカット！（タイ。ーアッパーカット口調）

「はぶっし！？」

「どこに居ても君達は変わらないのだな…」

青空に身を投げ出されながら、哲は呆れ気味の藍の言葉を耳にして、海へと消えた。

・
・
・
・

気を取り直して、ここは蒼く輝く海と壮大な山に囲まれた怜の別荘。怜の父さんに送ってもらった瑠樹達、ちなみに怜の両親も来るはずだったが

外せない用事が出来たらしく、送迎はするが別荘には一緒にいれな

いとこの事。

普通、高校生とは言え子供だけでは何かと危険だと思われるが
大人な藍が一緒だと言う事で、すっかり安心しきっている。

家が隣同士なので、俺と怜が学校に行っている間に藍と怜の母さんはすっかり仲良くなったようだ。

「相変わらず広いよな、怜の別荘は…」

「うん、見事な造形だ」

怜の別荘は木造2階建で、リビングやキッチンも広く、軽く10人程は泊れるくらいの広さだ。

地下には倉庫もあり、数週間は生活出来るようになってる。
ちなみに両趣味で映画鑑賞ルームやカラオケ、娯楽ルームもある。

「ははっ、ありがとう、とつとと荷物を置いて泳ぎましょ」

「そうだな、それでは2人共後で」

そう言つと、怜と藍は割り当てられた個室へと入って行つた。

「俺達も着替えるか」

自分の荷物を持って、着替えに行こうとしたが哲がぐいっとな肩を引っ張つて来た。

「なあ、瑠樹。お前藍さんの水着選び行つたんだろ？ どうだったんだ？」

「て、哲…お前怖い目が怖いぞ」

「いい加減話せよお、話せば楽になるぜい？」

血走つた目をぎらぎらに輝かせて、哲が激しく問い詰めてきた。

こういつ時の哲は、下手に誤魔化したりすると後が面倒だ。

「まあ、藍の水着姿はどれも可愛いし、綺麗だったぞ？ でもな…」
「でも？」

「…途中からナオミさんが加わって、なぜかナオミさんの水着まで俺が選ぶ事になった…」

「……」

「しかも、ご丁寧に俺の前と後ろの試着室で水着披露してくるから…目の行き場がな」

あれはしんどかったなあ…藍の水着姿を見て、なぜかナオミさんは対抗心が沸いたらしく色々な種類の水着に着替え出して

『どう、瑠樹くん？ こういつのもお姉さんに似合うかなあ？』

なーんて、言ってくるし。ナオミさん学生時代モデルのバイトしていたから

藍並に色気たつぷりの身体してるから、すごく目の行き場に困った。藍も藍で、急に険しい顔つきになって次から次へと水着をとっかえひっかえしてたし

「本当、生き地獄だったよ…」

「……この…裏切り者おゝ！！」

哲は心の叫びを残して涙目で自分の部屋ではなく、海へと走り去ってしまった。

あ、着替えせずに海に飛び込んだ…まあ、哲だからいいか。
でも…

「だから言いたくなかったんだよ、面倒なやつだなあ」

盛大に溜息をつきながら、俺は自分の部屋へと向かった。後ろから意味不明な叫びが聞こえてくるが、無視した。

「ううーん、快晴快晴。おまけに風が気持ちいいー！」

「これが浜風、運ばれてくる海の匂いも…確かに心地いいな」

眩しい程の日差しと爽やかな風を全身に浴び、砂浜に立つ2人の美女。

白いビキニの水着とシャツを羽織ったスレンダーかつ程良く引き締まった肉体美な美女、怜。

そして、もう1人は黒いパレオを身に纏い、大胆なボディーを見せつける金髪の美女、藍。

「瑠樹：桃源郷は、ここにあったんだな」

「不本意だけど、今回は全力で同意しておこう…あの2人が並ぶと反則だ」

本当に不本意だけど、全くその通りだ。

怜は昔からよく、プールとかに行つて水着を見ているが、ここ1、2年は行っていない。

その間にすっかり大人の仲間入りをしたらしく、抜群のプロポーションになっていた。

そんな美女2人を、穴が空くほど目を開いて凝視する哲…見るのは怜だけにしろよ？

で、俺は視線を逸らしながらも、ちゃっかり藍の水着姿を目に焼き付けていた。

「……／／／」
「……／／／」

そんな視線に気付き、照れながらも微笑み返す藍に瑠樹の顔は真っ赤になった。

「ふふつ、今日はサービスしちゃうわよ」

「お、おぉー！ 来てヨカッタよぉー！！」

怜の方はまんざらでもないように、モデルのように色々ポーズまで決めている。

その後、ビーチパラソルを立てて、早速泳ぐ事になったのだが…

「あれ、藍。海に入らないの？」

「ああ私はここにいよう。3人で行ってくるといい」

藍は荷物番をすと言いだしたのだ。

ここは怜のプライベートビーチだから誰か来る事はないのだけど

「ここは私達だけしか来ない場所だから大丈夫。だから、行きましようよ」

「そうそう、海に入らなきゃせつかくの水着がもつたいないぜ」

「いや、しかし…」

「ひよっとして、藍、式が外れるのを心配してるの？」

来る前に駄神羽入からもらった、駄神ボトルは…

『神様ボトル、なのです！！』

何か聞こえたようだけど、気にしないでおう。

『うぐう』

お前、それキャラ違うだろ。

……ともかく、もらってから早速藍が飲んで、色々試してみたが式が外れたり、隠した耳や尻尾が勝手に現れる事はなかった。効果は半永久的との事なので藍も大いに喜んでいただけ。

「…いや、その心配はない。あの神様からの贈り物は完璧だ」

どうやら違う心配をしているようだ。

「じゃあ、どうして？」

「私は……だ」

俯きだした藍は何かボソボソと呟いたが、よく聞こえない。

「ん、何？」

「……私は、泳げないんだ！」

「「「………」」」

衝撃の告白、固まる俺達。

「すまない、もっと早く気付くべきだった…私は、泳いだ事がないんだ」

「えっと、幻想郷に海ないから……あ、川とかは？」

川なら橙と一緒に泳ぎに行ったりしてると思ったが

「橙と川や湖に行った事はあるが、泳いだ事はないな…橙の式が外れるから」

なるほど…

「なんだ、それなら全く問題ないじゃない」

えっ？ 怜、一体何を言っているんだ？

問題ないって？ 見ると哲もウンウンと頷いている。

「俺が（瑠樹が）泳ぎ教えればいい…ん？」

ハモっているようで、肝心な所がハモらなかった。

「こら、哲！ なんであんたが教えるのよ！」

「い、いやいや、そうだよな、ここは違うよな、瑠樹だよな」

怜は哲の首を締めながら、少し離れた場所でこそそこそと何か話しているが、丸聞こえだ。

で、藍はハットとして、何か言いたそうに顔で俺を見上げている、その表情は反則だってノ！

「あ…その、俺でよかったら、泳ぎ教えようか？」

「い、いいのか、瑠樹の泳ぐ時間がなくなるぞ？」

「平気だって、今日明日に帰るわけじゃないんだし。それに…」

「それに？」

もう覚悟は決めた！ って何の覚悟だろ？

「俺は藍と一緒に海で泳ぎたいんだよ、嫌？」

ブンブンと音が聞こえそうな程に首を横に振り、藍は頬を赤くして笑顔で

「じゃあ、よろしく頼む…私も瑠樹と一緒にこの綺麗な海で泳ぎたい」

ードキッ

「今の藍の方が数倍綺麗だよ、って言いそうになった…俺にこんなセリフは似合わないっての！」

「そんな、事ないぞ？ それに綺麗と言われて嬉しかったしな…」

あれ、藍の顔がさつきより赤いぞ？ しかも、なんか煙が出そうなほど真っ赤！？ なんで？？

「瑠樹、さっきの言葉思いつきり声に出てた」

「…それと、最近結構キザなセリフを吐くようになってきたからな」

「うわっ！？ お前らいつのまに！？」

怜と哲が俺の背後で白い目を向けていた、なぜそんな目を？

ってさつきモノローグのつもりが思いつきり声に出してたのか俺！？

「鈍感…」

「リア充逝っちゃえ」

怜、俺そんなに鈍感？ で、哲にはそんな事言われたくないのどとりあえず殴っておいた。

そんなこんなで俺と藍は浅瀬で泳ぎの特訓、哲と怜は近くを軽く潜

って来るらしい。

今俺は藍の手を引き、少しつま先が付くかつかないかの深さの所に来ている。

「まずは…そうだな、藍は顔を水に入れるのは怖くない？」

「瑠樹、いくらなんでもそれは普通に出来るぞ…ほら」

そう言っただけで藍は海へと沈んでいった。流石に藍に失礼だったか。

藍の手…細いな。とても幻想郷最強の妖獣とは思えないな。

それにしてもあがつて来ないな…1分すぎてないか？

「藍、らん？」

ぺちぺちと軽く手を叩いても反応がない。

ぷかぷかと気泡が浮かんでくるが段々少なくなってる？
水面から下を見ても、特に異常はないけど

「おい、藍！」

俺も浮かんで見る、藍の顔が目の前にあった。

だけど、藍は俺を見ていない、視線は周りの海に釘付けだ。

ツンツンと頬をつついて、藍の手をとり浜へと引っ張って行った。

「ぷはっ！ はあ…藍、どうしたんだ？ 海中でボーっとしてただけ」

「はあはあ、すまない…少し海に見惚れていたんだ。海の中はこんなに綺麗だったんだ」

ここら辺の海はまるでハワイとかにいるかのように透き通っている。

だから、初めて海に潜った藍が見惚れしまつのも無理はない。

「ま、気持ちは分かるけど…それじゃ、早く泳げるようになって一緒に堪能しようよ」

「ああ、泳ぎの練習、頼んだよ、瑠樹」

その後…

「藍、足はもう少し柔らかく動かすんだ、変に力むと足つってしまっぞ」

「ああ、わかった、こうか？」

「そうそう、その調子！」

藍は身体能力が高く、スポーツ神経もいいので1時間もしないで泳ぎをマスターしていった。

「瑠樹！ 見ろ、もうこんなに泳げるようになったぞ！」

そこには見事なフォームで泳ぐ藍の姿があった。

「すごい、泳ぐとは、こんなにも気持ち良かったのか…」

生まれて初めての海で泳ぐ感覚、まるで子供のようにはいしゃいである。

いつもの凜々しさとは違った藍の一面を見れたし、本当、来て良かったな。

「…る、瑠樹！！」

「っ！？」

突然視界から藍が消えた。

目を凝らして、探してみると、さっきより大分離れた場所で藍がおぼれていた。

足でもつったか…しまった、俺が目を見失ったからだ！

「藍！！」

急いで藍の元へと泳いだが、藍の姿がまた消えた。

「やばいつ、藍！」

海に潜って辺りを探す、ここら辺は岩が多く、隠れてしまっただけ探すのが難しい。

…いたっ！

「がばがばっ！」

無我夢中で浮かばうとしているが、足に海藻が絡みついている。うまうま動けないようだ。

藍の手を取り、肩に担ぐようにして急いで浜辺に向かった。

途中で哲が様子を見に来てくれたおかげで、早く藍を運ぶ事が出来た。

「大丈夫、藍さん！？」

シートに寝かせて、呼吸を確かめる。

幸い意識はあるようで、すぐに水を吐き出した。

「ぶふっ…はあ、はあ……す、すまない。少し調子に乗り過ぎたようだ…」

藍は申し訳なさそうに俯きながら俺達に謝って来た。
「ただ、藍が悪いんじゃない。俺が悪いんだ…俺が目を離さなければ…」

「謝るのは俺の方だ、ごめん。目を離さなければ」

「いや、悪いのは私だ！ おかげでまたみんなに迷惑を…」

「はい、やめやめ！」

互いに頭を下げ、謝り合う俺達の間、怜が入って来た。

「初めて海に来た藍を、いきなり入らせたのは私や哲も同罪」

「そうそう、海に来たからと行って泳ぐだけが楽しみ方じゃないんだし、昼飯食ったら浜辺で遊ぼうぜ」

「だな、時間もいい具合だし、休みがてらお昼にしようか…藍、立てる？」

「怜、哲、瑠樹…すまないな。私はもう大丈夫だ、っと」

藍は起き上がろうとしたが、またフラフラと倒れ込みそうになったので、慌てて身体を抱き支えた。

「無理はするなって」

「すまない、思ったより体力を使ったようだ…」

「そっか、初めて溺れたから…かな」

「なら別荘までは、こうだな」

哲と怜が藍を俺の背中へとおぶさるように動かした。

「お、おい？」

「2人共、これは流石に…」

「いいじゃないの、別荘までそんなに離れてるわけじゃないんだし」
「瑠樹、藍さんを落とすなよ？」

2人に言われ、藍は力を抜き身体を俺の背中へと預けた。
それを感じ俺もしつかりと藍の身体を支え、別荘へと歩き出した。
俺も藍も顔が赤くなってるだろうけど、珍しく哲も何も言っ
てこなかった。

「でも、藍さんってもつと体力とかあると思ってたけどな、最強の
妖獣なんだし」

と、思ってたが哲が、俺が思っていたが口には出さないようにして
いた疑問を口にした。

そう…なんだか、今日は藍がいつもより人間らしく感じるんだよな。
いくら妖力とか封じて人間の姿になっていても、体力とか身体能力
は変わらないはず。

現に泳ぎだっですぐにうまくなったし、それは何か違う気がするけ
ど。

「こらっ、哲！　そういう事言うんじゃないわよ！」

「いや、いいんだ…確かに、この程度で根をあげるようでは紫様の
式としては失格だな」

「何バカ言ってるんだよ、今は式としているわけじゃないだろ。こ
れくらいの方が俺としては嬉しいけどな」

いつも以上に弱気な顔をして、弱音をはく藍の頭を軽く小突いた。

「瑠樹、ありがとう…」

少し、藍の手に力が籠り、俺に抱きつくような体勢になった。

背中にかかる柔らかさを必死に考えないようにしていた俺は、何か理性とかがぶっ飛びそうになったが

極めて平静を装っていたが…藍はともかく、哲と怜にはバレバレのようだ。

2人とも、ものすつごく暖かい視線を送りつつニヤニヤしている。

「ふふっ、この方が藍さんに頼られやすくなるから、じゃないの？」

「なんだか足取りもゆっくりだなあ？ そんなに藍さんを背負っていたのか？」

くそっ…別荘で藍を降ろしたらおぼえてるよぉー！！

そうして、パラソルなど荷物を念の為に浜辺の岩陰に隠してから別荘へと戻って来た。

「あれ、何かドアに手紙が張られている…」

先に鍵を開けに行った哲が、ドアに貼られている手紙に気付いた。ひとまず、手紙は後にして別荘へと入り、藍をソファーへと寝かせた。

「怜、手紙管理人さんから？」

「いえ…これは…はい、瑠樹」

中見を見た怜はなぜか苦笑いを浮かべて、俺へと手紙を渡した。俺宛の手紙？…でも差出人はないな、どれどれ。

『拝啓 瑠樹様、藍様へ

ごめんなさい。神様ボトルの副作用を言うのをすっかり忘れていま

したのです。てへぺろ（・ω・）

飲んで数日は体力が普通の人並みに低下する事がありますです。

しらばくすれば元に戻るので気を付けてほしいのです。

でもでも、ボトル本来の効果は半永久的なので大丈夫なので、海楽しんでほしいですよ！

神様より』

「……………あんの駄神！ 次についたらお仕置きだあ！！！」

続く

第5話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだぁ！！？」（後書き）

カガヤ

「はい、海です！」

瑠樹

「もうシーズン終わってるってのに…」

カガヤ

「季節感バラバラなのは俺の作品ならよくある事！」

瑠樹

「開き直るなよ！（汗）」

カガヤ

「それにしてもお気に入り数の伸びがすごい…皆さんありがとう…
ざいます！」

瑠樹

「これからもよろしくお願いします」

カガヤ

「ちなみに藍が泳げない云々は独自設定…多分藍しゃま泳げるよね
？」

瑠樹

「原作ではあまり想像できないけどな（汗）」

第6話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだぁ！！？」（前書き）

今日のマヨヒガ

紫

「（・・・）ニヤニヤ」

橙

「……紫様、先程からずっとそのニヤ顔ですよ？」

羽入

「薄気味悪いのですう……」

紫

「何か言った？（（。）——（。）（ギョロ！）」

羽入、橙

「「ヒイィ〜〜！？」」

紫

「そ、そんなに怖がらなくてもいいじゃない！……ただ、藍とあの子のうやりとり見てたら微笑ましくなっただけなのに……ゆかりん、シヨック」

羽入

「……自分でゆかりん言いますか……歳と見た目考えて欲しいのです」

紫

「……オ・シ・オ・キ・か・く・て・い・ね」

羽入

「あつあつうゝゝ!?!?」

橙

「藍様、今日もマヨヒガは平和です…まる!」

第6話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだぁ！！？」

とある海岸 怜の別荘

別荘での食事は基本的に、怜と藍が作る事になっている。

こっちの世界に来て覚えた料理を哲と怜にも食べてほしい。と藍が言ったからだ。

俺は毎日藍の手料理を食べているけど、日に日にレパートリーが増えて行っている。

藍も幻想郷では手に入らない食材を使つての調理が楽しいみたいだ。最初は煮物や焼き魚など和食ばかりだったが、料理番組や料理本を見て色々覚えてたようで

この前はドリアやハンバーグなどを作ってくれたけど、かなり美味しかった。

と言うわけで昼ごはんは藍が作る予定だったが、肝心の藍が溺れてダウンしてしまい

昼食は怜が作る事になった。

怜も料理は得意だが、今回初めて藍相手に料理をするという事で緊張して、ガチガチに固まってしまった為、哲も手伝う事に。

ちなみに、俺と哲の料理の腕は中の下くらいだ。

「すまない…私が作る予定だったのだが」

「気にするなつて、元はと言えばあの駄神が悪いんだ」

怜が昼食を作っている間、俺は自分の部屋で横になっている藍を看病していた。

あのスーパースーツから駄神に進化した羽入にもらったポトル。飲めば海に入っても式が落ちる事もなく、不用意に妖力が漏れたり

して正体がばれる事もない…が

副作用として、体力が一時的に普通の人間と変わらなくなる。そのせいで藍は溺れた時に、体力をかなり消耗してしまった。溺れてしまったのは俺が目を離れたせいだけ…

「誰かに看病されるのはいつぶりだろうな…」

微笑みながら、藍はどこか懐かしそうな目をした。

そんな仕草すら、凜としていてどこか気品も感じ、俺はドキッとしてしまった。

「…生まれてしばらくして、紫様の式神になって…思えば看病した事はあってもされた事はないかもな」

そっか、妖怪は元々身体が強いし、紫さんの式神になれば尚更、病気などはしないか。

「風邪を引く橙の看病ならたまにする事はあるが…なるほど、橙の気持ちがかかったよ」

そう呟いた藍はゆっくりと、ベッド脇に座る俺の方を振り向き…

「弱っている時に誰かが側にいてくれると嬉しいものだな…それが自分にとって大切な人なら…尚更だ」

後半の呟きはよく聞こえなかったが、俺がいる事で安心しているようだし、それでいいか。

なぜか気分のよくなった俺は…

「俺でよかったらいつでも側にいるさ」

と、思わず言ってしまった。

……これ、結構恥ずかしい事言ったんじゃないかなあ？
なんとか平静さを装うと四苦八苦していると。

「ああ、瑠樹が側にいてくれるなら…安心だ」

なんて、普段とは違った…さっきの凜とした女性のような顔ではなく
少し頬を染めた、まるで恋する乙女のような…怜が哲の前でするよ
うな顔で言ってきた。

「……………」

「……………」

思わず2人して顔を背けてしまう。

なんだろう、いつも家で2人きりなのに…今も2人きりだけど、全
然違う。

そりゃ、最初は家で2人つきりでもドキドキはしたけど、あれは緊
張からだっかし。

でも今は…緊張とは違うドキドキだ。

「…うう、なぜにこんなにも胸や顔が熱いんだ、風邪でも引いてし
まったのか…」

藍は藍で何かブツブツ独り言をつぶやいているけど、よく聞こえな
い…

・
・
・

—その頃、部屋の外では

「…あゝもどかしい！ もう告白みたいなことしてるじゃないの2人共！」

「瑠樹もだけど、藍さんも相当鈍感と言うか…もったいない！」

「何言ってるのよ、哲…お昼出来たと呼びに来たけど…あと30分くらいは放っておきましょう」

「だな、冷やし中華だし…問題はないしな」

と言つやり取りがあつたのは中のバカップル予備軍の知らぬ事だつた。

・
・
・

それからしばらくして藍が薬の副作用が解け、体力が戻つたと言つて起き上がったので
2人で下に降りると、ちょうど昼食が出来あがつたらしく、哲と怜が盛り付けをしていた。

「おやおや、さっきは随分とお楽しみだつたようで…イダア!？」

俺達を見た、哲が何か言ってきたのでとりあえず殴る、怜も一緒なのはいつもとして…

今回は耳まで赤くなつた藍の拳も加わっている。

「藍さん…」

「あつ、いや…すまない、つい…な」

「「いや、グッジョブ!」」

その時の俺と怜の顔は、とてつもなく爽やかだった、と後に藍は語つた。

「バカはほつといて、食べましょ…藍さんに食べてもらうのってなんだか緊張するなあ。」

藍さんの料理すごく美味しいんだもの」

怜は何回か俺の家と一緒に藍の手料理を食べた事があるので、藍の腕前はよく知っている。

「ははっ、私などまだまだ。では、頂きます」

ズルツ、と藍の食べる音が響く。怜はじつと藍の食べている様子を見ていて俺までつられて藍の様子をじつと眺める…変な緊張感が漂う。ちなみにバカはまだのびている。

「うん…具の味付けと麺がよく合っていて、美味しい…」

「良かったあ」

よほど緊張していたのか、怜は深く息を吐き椅子に座りこんだ。俺といつの間にか復活した哲も冷やし中華に箸を伸ばす。

胡瓜やハムなど、使っている具は普通の冷やし中華と変わらないが具の一つ一つに味付けがされていた。

「おお…うつめえ!!」

「そ、そんな感動する程じゃないでしょ、哲」

「いやいや、本当に美味しいよ、怜。丁寧に味付けされてて味に深みがあるよ」

「る、瑠樹まで！ もう…いいからどんどん食べちゃって！ まだあるんだから！」

「こんなに美味しい冷やし中華は初めてだ。これならいくら食べて

も飽きないな」

「ううゝ…お、おかわりもってきますす!!」

哲と俺に褒められ、怜は照れを誤魔化すように藍から皿を半ば強奪し、台所に行ってしまった。

怜は褒められるのが苦手、と言うほどではないが、あまり免疫がない。

特に料理に関して、自分はまだまだだと思っっているようで、よく食べている哲や俺だけでなく

自分の料理を初めて食べた藍にまで絶賛されたのが嬉しいようだ。

「へっへゝ、どうですか、藍さん。俺の自慢の彼女は！ 可愛いだけじゃなくて料理もうまいでしょう？」

「そうだな。これほどの料理が出来る人を彼女に持って、哲は幸せ者だぞ？」

「あつたりまえっすよゝ！ 何せ怜は未来のおく…「うっさい！」…イダッ!？」

あゝ、すごい。今怜、完全に気配を消して哲の後頭部に回し蹴りを…しかも、片手に藍のお代りを持ちながら。

「全く、大声で何を言おうとしてんのよあんたは!」

台詞は怒ってるけど…顔が怒ってない、それどころか照れまくりだ。藍は口に手をあて笑いを堪えている。

ちようど水を飲んでいたらしく、吹き出すのを我慢してるようだ…あれ、苦しいんだよなあ。

「はいはい、そのバカップル、夫婦漫才はもういいだろ」

「…バカップル予備軍のお前に言われたくない」

「お、おう!？」

意外な反撃に俺は思わずどもってしまった。

俺が、バカップル予備軍? …相手は…藍しかないよな。

と、自然に顔が藍の方へと向いたが

「……………この冷やし中華はぜっぴんだなあ」

と、恐ろしい程の棒読みで、藍はあっちの方を向きながら冷やし中華をかきこんでいた。

こちらから見えたうなじが妙に色っぽかった

「…なあ、早く食べて…つめたあゝい海に入らないか？」

「そうね…思いつきり冷たい海にどっぷりと浸かりたい気分ね」

お前ら…風呂にでも入りに行く気か？

・
・
・

そんなこんなで無事(?)に昼食を終え、藍もすっかり力が元に戻ったので

午後は浜辺でスイカ割りをする事にした。

「やっぱり海と言えば、これよね」

哲が別荘の冷蔵庫から大きな萃香…西瓜を運び、怜が木刀やブルーシートを用意した。

「…萃香が聞いたら泣きそうだな」

幻想郷には西瓜はあるが、西瓜割りと言うのは聞いた事がないらしく興味津々だった。

「と言うか準備がいいな、2人共」

せっせっせと西瓜割りのセッティングをする哲と怜。

「だって…海と言えば西瓜割り（だろ・でしょ）！」「」

なぜに目を輝かせてまで力説するんだろ？

ともかく、準備を終えて、じゃんけんで割る順番を決め、最初は怜がする事になった。

「右だつ！ 右！！」

「こ、こつち！？」

目隠しをして、哲の指示で右へ左へとちょこちょこ動く怜。

その動作は見ていて、少し可愛らしいと思ったが…横に居るバカは真剣に指示を出していた。

「瑠樹、これが西瓜割りと言う物なのか？」

「ああ、1人が目隠しをして木刀とか木の棒で西瓜を割る役で、周りがその人に指示を出すんだ」

「そうか…ならば、私も怜に指示をしていいのか？」

「指示を出すのも西瓜割りの楽しみの1つだし、うん… 哲、怜、藍が指示出すから！」

「おお、分かった！」

「藍さんお願いしまーす！」

別に指示を出すのは誰でもいいんだけど、なんだか暗黙のルールで

指示役は1人になっていた。

それにしても…哲の指示が下手なのか、怜の動きが悪いのか…なん
で、怜は海に入ってるんだろ？

「こほん…それでは、怜。まず…180度転回だ！」

「はいっ！…って、ええええ！…？ 哲う！ あんた私をどこに
誘導してたのよ！…」

「いやあ、途中方向転換しようとしたんだけど、気付いたら…」

苦笑する哲だが、半分くらいわざとやっていたとしたかと思えないんだ
よなあ。

これは後で制裁食らうかもな。
でも…

「怜、自分の足が海水に浸かってる事に気付けよ…」

「し、仕方ないじゃない！ ちょっと集中してたんだから！」

「大丈夫だ、私がしっかりと怜を安全な方に導く！ そのまま5メ
ートルほど前進だ！」

「はっ…はい！」

「次は、2時の方向に2・4メートル前進！」

「に、2時！？ 2時って何い！？ しかも細かい！」

藍は藍でまるで命がけのように、真剣な顔つきで怜に指示を出して
いる。

応える怜も、さっきよりも顔つきが険しくなった。

これ……ただの西瓜割りだよな？

「右に38°…そこだ、怜！」

「細かい角度は分からないけど…ええい、いつけえ！…！」

―スイカツ

「…あっちゃあ」

「すまない、怜…私の指示がふがないばかりに…」

「いやいや、藍さんの指示は正確でしたよ！」

「むしろ、正確すぎ…」

結果は、おいしい所までは行っただが、木刀は西瓜を僅かにそれた。

普通の人間に46°。右とか言われても、どれくらい動けばいいか分からない…

それにしても…なんだ、今の効果音？

続いて挑戦するのは、藍。

生まれて初めての西瓜割りに若干緊張しているのか、握る木刀に力が籠っている。

「藍さん…あまり力まなくても、これただの遊びですからね？」

「問題ない、大丈夫だ」

木刀は今にも握りつぶされそうで、西瓜の場所を変えた哲も冷や汗をかいている。

「よしっ…行こう！」

「だから、藍さん、戦に行くんじゃないんですよ!？」

気合の入った目隠しをした金髪の水着美女が木刀片手に突き進む…
絵になっているような、なってないような、だな。

俺達は藍の西瓜割りをハラハラして見守っていたので気付かなかったが

ちょうどこの時、いかにもチンピラです、と言った格好の2人組が俺達の背後に迫っていた。

「おい、あそこ見ろよ…」

「おつ、いい娘達がいるじゃん」

「男連れつてのが…また難易度高くていいんだよなあ」

「いざとなれば…これで気絶させて…頂こうぜ」

「お、スタンガン！ いいねいいねえ〜うつひっひっひっ」

そんな下劣な2人組が近付いてるとは露知らず、藍の西瓜割りが始まった。

「藍、もつと右…えつと、3歩分！」

「3本分だな、これくらいか」

「そうそう、そこでまっすぐ…5歩くらい前進して、藍さん！」

「次は…5歩、うーん、目隠ししているせいか…やはり緊張するな」

俺達の指示に的確に反応し、藍は正確に動いて行く。

こうなってくると俺達の指示の正確さにかかってくる。

指示通りに動くと言うならば、正確な指示を出せばいいだけの話。

「藍さん、そこで止まって！」

「むっ…ここか！」

「ストップ！ 少し左です、左に身体を回して…えつと、気持ち程度！」

先程の藍のように正確に角度を指定出来ればいいけど

三途の川の川幅を算出する方程式を生み出した程の頭脳の持ち主の真似など、出来るわけない。

「おい、見ろよ。あいつら西瓜割りなんかしてるぜ」「ヒソヒソ

「ああ、でもおかげですごく無防備だな」「ヒソヒソ

「今のうちに男たちを気絶させるぞ」「ヒソヒソ

「おっけ」「ヒソヒソ

「…行くぞ!」

「ここかあああ~~~~!!!!!!」

藍の気合の入りまくった怒号と共に、木刀は空間ごと切り裂くような勢いで西瓜へと振りおろされた。

―ズドォーン

「~~~~~!!!!?」

「「わ、割れたあ~~~~!!?」」

……あ…ありのまま今起こった話を話すぜ!

俺達の目の前に広大な砂浜があったと思ったら、ざっくりと割られてたんだぜ。

な…何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「あ、あわわわわ……す、砂浜が…こ、ここは夢だ…悪夢なんだあ~~~~!!」

「ぎゃわあああ~~~~! ま、待ってくれ…俺を置いてかないでくれえ~~~~!!」

と、現実逃避をしていると、後ろで何か悲鳴のような物が聞こえ誰かが走り去るような足音がした。

「……………すまない、力加減を間違えたようだ……………」

「ア、アハハハ……………流石は最強の妖獣……………」

「副作用もすっかりなくなつて……………全力全壊のようね……………」

「……………西瓜は綺麗さっぱりに斬られてるな、しかも木刀も無傷……………ははっ、すげえ……………」

どこをどうなつたらこうなつたのか藍自身も分からないようでざっくりと、西瓜ごと綺麗な切れ目が入った砂浜を眺め、しょんぼりとこちらへ顔を向けた。

あ、その顔……………可愛いなあ……………と、またもや現実逃避。

「これ……………どうしようか……………」

底が見えないほどに割れた裂け目を前に、俺達は茫然としていたがこのままにするわけにもいかなかった。

「……………仕方ない、私が直そう……………さっき誰かに見られたようだから……………」
「大丈夫?……………」

藍は普段自分で妖力を押さえている。

さっきのは、緊張したのと少しはしゃいだせいで、少し押さえが効かなくなつたらしい。

それでも、藍の妖力をもつてすればこれくらいはすぐに直せるそう
だ。

「幸い砂だからな。普通の大地や木々を直すよりも簡単だ……………」

きよろきよろと辺りを見渡し、俺達以外誰もいない事を確認し藍は地面に手を付いた。

すると、見る見るうちに切れ目に砂が勢いよく流れ込み、あっという間に塞いでしまった。

「す、すい…」

「改めて藍さんのすごさが分かったわ」

哲と怜は心底感心しきっている。

俺はと言えば、以前に食器をうつかり割った時に同じような事を見ているので、平気だ。

「私のせいで…本当に申し訳ない。今日は朝から迷惑をかけっぱなしだな…」

ますます凹んで俯いく藍、少し目に涙まで浮かべている。

「少し、浮かれ過ぎていたようだ…こんなに楽しい時間は生まれて初めてだったから

紫様や橙、他の幻想郷の皆と過ごした時間とはまた違った楽しさがここにはあって…」

「はい、藍。そこでストップ」

更に謝罪しようとする藍の口を指でふさいだ。

「俺や怜に哲も、別に迷惑なんて思っていないんだからさ。確かに色々ハプニングあったけど

それでも、俺達にとっては良い思い出の1つになってるんだし、なあ？」

「そうそう、このバカがする事に比べたらこれくらい可愛いものな

んだから」

「へへっ、滅多に出来ない体験をしてるんだし…って、怜、俺普段そこまでひどい事してるのか!？」

「ほら、コイツなんて全然自覚ないんだから」

藍を慰めるつもりが、怜の言葉でうまく締める事が出来なかった哲…哀れ。

「俺は藍と一緒に海に來られて、嬉しいんだ。だから…そんなに落ち込まないで、楽しもうぜ」

「瑠樹、ありがとう…」

「哲、アレ…どう思う？」

「…なんか慰め方とか台詞が思いつきり彼女を慰める彼氏みたいだな…しかも、王道パターン」

「「……コ、コホン」」

ジト目で何かブツブツ言ってくる2人に軽く咳払いして、仕切り直し。

でも、俺と藍の顔の赤みはしばらく取れそうもなかった。

「そ、それでさっき何か人がいたようだが…不味いのではないか？」

「そう言えば、何か逃げてった人いたわね。地元の人じゃないっぽいからほっというていいんじゃない？」

藍はどうやら気付いていたようで気にしていたけど、特に問題はないだろう。

砂浜を割る水着美女がいる、だなんて話を信じる人はいない…と思う。

「これはフラグですね、分かります」
「不吉な事言っな!!」

続く

第6話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだぁ！！？」（後書き）

カガヤ

「あー3連休が終わるなあ…」

瑠樹

「気が付いたら終わってたもんな3連休…じゃなくて！何後書きでいきなりだらけてるんだよ！」

怜

「そうよ、それに今週は3日出ればまた連休じゃない！」

カガヤ

「そうだった（ノハハ）ノヤッホーイ」

哲

「安直なやつ…」

瑠樹

「で、今回最後に嫌な正体バレフラグ残したけど？」

カガヤ

「フラグ？そんなのないよ？？あの不良2人は本当にただのモブなんでこれで退場です」

怜

「意味深な事書くなぁ！」

カガヤ

「だーって、こんなのでシリアスにしたって俺のメンタル持たないもん」

哲

「誰もお前のメンタルなんて気にしないっての！」

カガヤ

「次回は夏祭りですよー」

瑠樹

「もう季節は秋だっつつの…」

第7話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだぁ！！？」（前書き）

今日のマヨヒガ

橙

「スイカ割り、橙はしたことありません…」

紫

「ふっふっふっ…橙のために用意したわよ、『すいか』割り」

萃香

「いやだぁー！離せー、ってかこの鎖解けないぞぉー！！」

紫

「それはそうよ、駄神の羽入に頼んで持ってきた『天○鎖』だもの」

萃香

「私は鬼だ！神様なんかじゃないぞぉー！！」

羽入

「…なんで知ってるんですか、エ○キドウ」

その後、スイカはスタッフが美味しく頂きました。

萃香

「違うぞ！ちゃんとした西瓜でやっただからなぁー！！」

第7話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだあ！！？」

怜の別荘 二日目

藍が昨日のお詫びにと、張り切り過ぎた朝食を食べて俺達は別荘近くの町へとやってきた。

美味しかったから残さず平らげたけど…結構お腹キツイ。

ま、美味しそうに食べる俺達を見る藍がすごくいい笑顔だったから…いつか。

「ここらへんもほとんど変わってないな」

「ま、2年くらいしか経ってないんだし、早々変わらないわよ。それよりあそこみて！」

「おっ、まだあそこのたいやき屋やってる！ 帰りに買って帰ろうぜ」

「あっちの和菓子屋も懐かしいわねえ、あそこも後で行くわよ」

前を歩く哲と怜は久々に来ても、変わらない街並みにあれやこれやと思い出話をしている。

なんか、老夫婦みたいな会話になってないか？

「……………」

そして、数歩後ろで藍が申し訳なさそう顔をしながら着いてきている。

「藍？ さつきからずっと黙ってるけど、どうしたんだ？」

「瑠樹…やはり、浴衣は私以外で買ってくれないか？」

そう、今日街に出かけた目的は…全員分の浴衣を買う事。

実は明日の夜、近くの神社で大きな夏祭りがある。

別荘へはこれに合わせて来ている事にしていたので、今から楽しみだ。

そして、ここには怜の親戚が営んでいる和服専門店があり、色々融通が聞く…

なので藍の分も買う事になったけど、肝心の藍が拒否してしまった。

『浴衣など、私には似合わない。怜のような綺麗な黒髪にこそ似合うだろう』

と、あまりよくわからない理由。

別に黒髪でなくてもいいと思うんだけど、外人さんも浴衣着るようになったし。

藍ならなんでも似合いそうだな…前にナオミさんの店で色々試着した時の服装…

チャイナドレスとか…胸元が開いたドレスとか…うん、思い出すの止めよう、色々とヤバイ。

ともかく、藍に浴衣は絶対に似合う！だから絶対にきて貰う！何より俺が見たい！…理性が妖しくなりそうだけど、そこは頑張ろう！

色違いのお揃いの浴衣とかあるかな…あつたらいいな、それで2人で花火を…

って、俺は何を言ってるんだ。パールック、恋人じゃあるまいし…でも恋人に見えたら嬉しいかなあ。

「…瑠樹」

「うおっ！？　れ、怜いつのまにそこに？」

考え込んで（妄想して）いると、隣にいつの間にか怜がジト眼でこ

つちを見ている。

哲もあきれ顔でこつちをみているけど、どうしたんだ？

「「さつきから考え事思いつきり声に出てる」「

えっ…マジ？」

恐る恐る、後ろを振り返ると…

頭から湯気を出して真っ赤な藍が。

「その、そこまで瑠樹が言うなら…着てみたいが、流石にペアルックは…は、恥ずかしい」

「……あー…その、とにかく…藍がその気になってくれて、嬉しい……よ？」

何と言うか、藍は普段はクールだけど、たまに物凄く可愛くなるから、困る。

「瑠樹、最近なんか馬鹿になってきてないか？」

「……うるさいな、哲」

そんなわけでやってきた、和服専門店。

この店長さんはナオミさんのようなノリの人じゃないから、多分問題ないだろうけど…

露出の激しい浴衣とか、それ系出されたら困るな…いや、それはそれで…

「だから、口に出てるっての」

「またか！…あ、でも今回は藍に聞かれてないからいいか」

藍は怜に連れられ店の奥へ、俺は哲と男物の浴衣コーナーで物色中。

「ホント、俺と怜をバカップル呼ばわり出来なくなってるな」

「それでも、お前らには負ける」

「それでも？…少しは自覚あつたんだな」

「うっ」

哲に言いくるめられた…軽くショックだ。

「それより、これ…どうよ？」

じゃーん、と哲が俺に見せた浴衣は…紺地に、黒で描かれた横段や縞模様がある無難なものだ。

「どうよ、って別に普通の浴衣だろ？」

「ふっふっふっ…ところがだねきみい…じゃじゃーん！」

ついには自分で言ったよ、じゃじゃーんって。しかも、きみって…

「驚くなかれ、なんと背中にこんなものが！」

哲が浴衣をひっくり返し背中を見せるとそこには…龍がいた。

緑色を基本とした、見事な龍が描かれている。

「どーよ、これ。聖闘士。矢みたいでかっこいいだろ」

「…廬山亢。覇でも放って宇宙に消えちゃえ。なんでそんな派手なのがあるんだよ」

「お前の分もあるぜ、ほら」

そう言っつて哲が指さした先には…背中に虎が描かれた着物。

「龍と虎、これではつちり決まるだろ？」

「却下だ、大却下！」

龍や虎の柄や紋と言うのは聞くけど、龍そのものが堂々と描かれた浴衣なんて聞いた事ない。

「店長…いかすぜ、この浴衣！」

「ははっ、久々に聖闘士聖○を見てピーンと来たのよ、今年はこれで決まりってな！」

「グッジョブ！」

あ、店長と哲が親指を立て合っている…というか、モチーフそのまんまかよ！

インスピレーション受けるにしてももっとこうソフトに受けようよ、店長…

「何なのこの浴衣！ 全身に鎖が巻きついてる柄じゃない…！」

「しかも…胸が強調されるような巻き付け方に描かれてるな…」

向こうから怜の叫び声が聞こえた。

あつちはアンドロメダ星座かよ！ ってか全身に鎖巻きついてるのはなんか違うし！

というか…藍、まさか今それ着てないよね？

「……それ、瑠樹に見せに行かない？」

「絶対に行かない、もう着替える…！」

本当に着てたんだ…普通着る前に気付くだろ。

「く、鎖とは…なかなかいいセンス」

「本当はさー本物の鎖を巻きつけようとしたんだけど…重くって」

そりゃそーだ!!

大丈夫かな、この店…今年で潰れないだろうか。

結局、哲を説得し白と黒地の浴衣と紺色の浴衣を買った。

怜と藍もいいのが見つかったようで、満足な顔をしている。

仕立て直しは明日の昼に終わると事前に確認していたので、どんな浴衣を頼んだかは

明日までのお楽しみだ。

「せっかく、街まで来たんだし。春に出来たゲーセンでも行ってみない？」

「おっ、来る時見かけたあのでっかいゲーセン？ 行こう行こう！」

近くの蕎麦屋で昼食を済ませて、午後をどうしようかと思っていたが怜の提案でこの近くに出来たゲーセンに行ってみる事にした。

「ゲーセン、ゲームセンターか…興味はあったが、そうか、ついに行けるのか」

藍はゲーセンというのがどうなのかは知ってはいたけど、行くのは初めてのようだ。

そう言えばカラオケや映画館には行った事あったけど、ゲーセンは連れて行った事なかったな。

ちなみに藍は隠れゲーマーだ。

家に1人である時に退屈凌ぎにと、ゲームのやり方を教えたが…学校から帰ってみると…すでに短時間でクリアできるゲームをクリ

アしていた。

『やはりバ。オハザードナイフクリアに限るな。追跡者とのスリルが堪らない！』

ストレス、溜まってたんだな…

今じゃいかにハンドガンだけでクリアするとか、変わった縛りプレイをしている。

って言うか…なんでバイ。？ しかも、3以前の？

と、まあ…藍は家事をこなした後のゲームのひとときが日課の1つになってしまった。

眼が疲れない程度に休憩時間を入れてるからいい、のかな？

そんな藍がゲーセンでやりたいゲームあるみたいだけど、なんだろう？

ハ。ズオブザデッド？ あれ、まだあるのかな…

「ふふっ…とうとう、出来る…マ。オカートが！」

思いつきり違ったー！？

確か、前に4人でマ。カーしたら、周回遅れするほどボロ負けしてリベンジに燃えてたけどさあ！

「…怜、久々にプリクラ撮ろうぜ」

「そうねえ、何か面白いの出たかしら」

こっちはこっちでデート気分だよ。

そんなわけで、ゲーセン到着。

最初は4人で出来るゲームをやりまくろうという事になり、まずは藍の熱望でマ○カー。

「うおっ、な、なんだ勝手にジャンプしていくぞ!？」

「あ、それウサミミだ」

「ああゝもう、テレサ邪魔!！」

「雑草突入ゝ!……くそお!」

「哲ゝあんたよくも甲羅ぶつけたわね!」

「となりの瑠樹狙ったんだあ!」

「藍…ドリフトうまいな」

「ふっふっふっ、コントローラーとタイミングは変わらないからな」

…各人の音声(?)のみで状況判断出来ると思うので勝手に割愛。

それから、わざわざ隣の台からマレットを借りてのエアホッケーダブルス。

じゃんけんで俺と怜、哲と藍がペアになったのだけれども…

「…怜!」

「任せ…て! よし、入ったあ」

「流石、怜」

「いやいや、瑠樹の的確な指示のおかげよゝ」

俺と怜は笑顔でハイタッチ。

ゲームは俺と怜が、絶妙なコンビネーションで着々と点を入れて行くが…

「……」

「ら、藍さゝん? 無表情でマレットを握りしめないでえ! ミシミシ言ってる!！」

「…哲」

「は、はい！？」

「……………負けハ許サナイ」

「い、イエッサー！」

ん、あつちはあつちでなんだか盛り上がってるな。
藍も興奮気味だし、楽しんでるんだな。

「…瑠樹、眼科行っただ方がいいわよ？」

「なんでさ！？」

その後、圧倒ムードは哲の必死の頑張りと藍の鬼気迫るラッシュで
吹き飛ばされ、接戦の末、敗北した。

「ありや、負けちゃったわね」

「ま、藍が楽しんだみたいだから満足だけだな」

「瑠樹……………」

怜にため息混じりで睨まれた、なんでだ？？

「よし」

「……………よ、よかったあ」

あつちはあつちでなんだか死地から戻ってきたかのような解放感が
あるな…主に哲に。

その後、ス。？やら、。DRやらで遊びまくり…

「そろそろ帰りましょうか」

「そつだな、今帰ったらちょうどいい時間だな」

日が沈み始めた頃、俺達はゲーセンを後にしようとしたが、怜が入
口で突然立ち止まり

「ああゝ！ いけない、大事な事忘れてたわ、みんな戻るわよ！」

と、藍と俺の手を引っ張ってゲーセンへと戻った。

「ふう、すっきりすっきり……あれ、みんな……どこだ？」

トイレに行っていた哲を1人残して。

「そんなわけで……やり残した事、それは……プリクラよ！」

やってきたのはプリクラコーナー……そう言えば、やるとか言ってた
よな。

「へえ、最近のプリクラは機種が増えたなあ……って言うかカップル
多い！」

いつの間にか合流した哲が驚いたように辺りを見渡す。

見た限りでも3、40台くらいプリクラの台があり、カップルや女
子高生らしき集団が多い。

「ま、俺達もカップルみたいなものなんだからいいだろ」
「そうね」

2人の言葉に藍と自然に目が合い、慌てて逸らす。

顔が真っ赤だったのは、きっとこの熱気のせいだと思っておこう。

「……ますます磨きがかかってるわね」
「見ていてもどかしいな」

うるさいよ、バカップル。

そうして、まずは4人で撮ろうと近くで空いていたプリクラ台に入る。

「それじゃ、藍さん。ここにあるカメラを見て」

「ふむ、これか…おお、画面に映し出されたな」

「ここでフレームとか枚数を決めるのよ」

藍は少し身を乗り出すように画面を見ている。

それはいいんだけど、藍の下で少しかがんでいる俺の背中に…藍の感触があ！

うう、柔らかいし大きいし…動くからモゾモゾするし。

「溜樹、どうよ？」

今の状況分かっていて、隣でニヤニヤしながら呟く哲に顔面チョップをした。

俺は悪くないはず。

「それじゃ、撮るわよ。はい、チーズ！」

ーパシャ

写されたプリクラを画面で確認するが、藍の笑顔がぎこちない。

「藍さんの顔、少しぎこちないわね」

「済まない、写真自体もあまり撮らないから…」

「もう一枚、もう一枚撮れるから大丈夫だよ、藍」

そうして、2枚目の撮影。

が、ここで哲の背中に手を乗っけている怜の指が、隣にいる藍の首筋をひとなでした。

「わひゃああゝ!?!」

「っ!?!」

―パシヤ ゴンツ

突然の感触にびっくりした藍の体勢が崩れ、俺の背中に倒れ込んできた。

そして、背中に再び押し付けられる2つの山。

これは不意打ちだったので、かなりびっくりして支えきれなかった。そのまま倒れ込んで、台に思いっきり頭をぶつけてしまい…その寸前を撮られた。

「これは…すごいわね」

「でも、結構いい写真じゃないか?」

「どこかがだ!」

プリクラに写っていたのは…

真っ赤になって驚き俺に倒れ込む藍、とびっくりして眼を見開き前に倒れこむ俺の姿。

怜は藍の反応に手を口にあてていて、唯一哲だけはしっかりポーズを決めていた。

「…せっかく、だしね?」

結局プリントし、4人で分ける事に。

流石にこればかりじゃ味気ない、とリベンジを兼ねて大型のプリクラへ。

今度は藍、俺、哲、怜の順に並び、ちゃんとしたのを撮る事に。

終始藍は怜に警戒をしていた、よほどさっきのが効いたんだろうな。

俺も別の意味でかなり効いたのは…秘密だ。

「後で藍さんの感触、教えるよ?」

黙れ変態!

続く

第7話 「海だ！ 水着だ！ 夏祭りだぁ！！？」（後書き）

カガヤ

「久々に更新！」

瑠樹

「本当にそつだな……」

怜

「全く、もう10月も半ばなのにいつまで夏休みなのよ」

哲

「半そでは流石に寒い……」

カガヤ

「哲はその格好で問題ないだろ、馬鹿は風邪引かないし」

哲

「ひどっ！カガヤだって馬鹿だろ！」

カガヤ

「いや、俺はちゃんと風邪引いたぞ？」

怜

「夏風邪は馬鹿が引くんじゃなかったかしら……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1751v/>

俺と彼女の現代録～あのキャラがある日、俺のベッドに！？～

2011年10月16日10時03分発行